か所の予定枚数をずい分超過した。しかし、それに相当する内容が充実しているものと信じる。

和宇慶を中心とする津覇、伊集の部落一帯は、台地の上原地方へ上る急坂、崖になっているので、日本軍の陣地が随所にあって、兵隊、陣地と住民との交渉も多かったようである。これらの隊、兵隊と、住民との接触関係もくわしく調査すれば、軍への協力、供出、徴用等に、また軍民の人間的関係などにも記録に値するものがありはしないかと考えられたが、それを調査する余裕がなかったのは残念であった。

新垣盛正（十六歳）　護郷隊

満十六歳ですからね、僕の場合は。僕の家の三軒上が部落の公民館ですが、そこに約五十名の兵隊がいました。そこの小隊長みたいな軍曹がいました。その人はわたしのおばなどともよく知り合って、僕が若いもんだから坊ちゃんと呼んでいましたが、その方が、あなたの部落の青年をみんな集めて来いと言われたので、五、六名最初は行って、和宇慶の旧部落の方に大きな橋があったんですよね、これを爆破するのが最初の作業でした。アメリカが上陸するからそのままにして置いてはいけない、戦車とかトラックが通らないようにというのでした。

それを爆破すると、それからここの壕ですね、松尾の。その中に入って中城湾に浮いているアメリカ軍艦ですか。双眼鏡で毎日あればかり見ているんですよ、約十四、五日間、兵隊といっしょに。

当時組合服というのがありましたね。あれと、軍から開襟シャツ半袖、これと手榴弾二発ですよ。もう何もない。靴もきれいなものを穿かして。それで僕たちが兵隊といっしょになりたがるということは、とにかく御飯が食べられること、それから供出した豚肉とか山羊肉ですね、あれがいっしょに食べられるということでした。それで壕に行ったらやっぱり芋でしょう。芋とか、お砂糖とか澱粉なんか水に溶かして食べるんですからね。

それで四月のたしか僕の記憶で十五日と思うんですが、その時はここらはいっぱいしているわけですね（米軍のことを言っている）。僕は、崎原小という壕にずっといたんですからね。看護婦はもう後に下って。今うちの部落でわたしより二つ年下とか同期生の方がたが護郷隊として戦死してですね、四名、その保証人も自分がやっているんです。

この四人のことですが、この部隊の木田中尉という方がですね、今東京の援護関係の事務をして、そして僕が保証人になって印鑑捺して四名分送ったら、木田中尉がこれを承認して、今全部が援護金を貰っているわけです。

話は、四月の十五日に戻りますが、小原という軍曹にですね、僕の家族は全部伊集の方に行くから、これは和宇慶に移さんと、相当はげしいらしいからといいました。

ところがその十五日の晩、そこを越える時に僕はここやられてしまったんです。この山の横っ腹に壕があったんですが、機関銃の音が日本製とアメリカ製は違うんですよね。たしかにアメリカ製だがとわたしは直感したんですよ。そうして大体日が暮れそうになった

時に、おふくろとか兄弟たちを越えさせたんです。わたしは八名兄弟で二番目ですが、他の兄弟たちは越えさせたので、僕の友だちと、おばさん、それに父と僕四名が後から越えたわけです。

そうしたら機関銃の掃射にあって、三名はどこに行ったか亡くなって、僕一人だけ怪我して、そのまま翌日まで倒れていて、捕虜にされた。

四月の十七日ですか、今のユザの警察がありますね。そこに長テント、五棟しかないですね、一般民の病院なんですよ。看護婦もアメリカ女、医者もアメリカ。向こうに僕は一月半入院していたんですがね。その間に、六月（五月の記憶の誤りではないかと思う）の末頃ですね、首里が陥落したとか島尻のどこ行っているとか、そういう情報が聞こえて来る。

それで一番気の毒だなあと思うのはですね、その方、ぜんぜん顔も今忘れません。平和館の映画技師という方ですが、元平和館という映画館がありました。その方は大城さんという方ですが、ここ（臀部を示す）やられているんですよね、これくらい（手で直径二十センチ位の輪をつくって見せる）。この方はたしか亡くなったと思うんですよ。それでその足の骨、腰の骨が全部見えるんですよね。顔も大きく膨れて、僕のベッド隣りですがね。この疵が次第に大きくなって行くんですよ。その人が遺言だろうと思うんですが、「僕は平和館の技師をやっていた大城というもんだ」といいましたがね。煙草をよく吸うんです。

僕の場合は、手だから首からかけて、白い繃帯でつっているので、病人ということがすぐ分りますので、どこを歩いても、アメリカ兵なんかも何もいわなかったですよ。

それでこの大城さんがウジが出るんですよね。病院にいても一週間に一度しか治療しませんからね。病院には通訳みたいにして二世がいるんですよ。それでこれではいけないから治療して下さいと二世に言ったわけですよ。うじが出ていますから、といって。そうしたら、ウジは腐るのを食うんだからいいよといって取り合わないんですよ。

その頃、友軍の飛行機が毎晩来るんですよ。毎晩、毎晩西海岸では。毎日のようにアメリカの船が沈むんですがね。

それから僕がいつまでも忘れられないというのは、女学生ですがね。おかっぱして、僕と同じぐらいの年でないかなあと思ったんですがね。第三病棟というのがあったわけです。その女学生が惜しいことに、ここ（下腹部を示す）怪我しているんです。テントの前にですね、白い布を張ってですね、この女学生の治療をするわけです。だがアメリカ兵がですね、何時頃この女の子を治療すると聞いたんでしょうね。白い布を張ってあるんですが、アメリカ兵背丈が高いもんだから全部見ているんですよ、その治療するのを。わたしが知っているのは一回ですが、前の日も毎日治療していたんではないですかね。治療は、一週間に一回だのに、この女学生は毎日治療していたんですね、白いテントを張って。医者は早く癒してやろうと思ってだったかもしりませんが、兵隊たちは、それを面白がっていたのではないですかね。口笛を吹いたりしていたので、皆で見ているのをこの女学生にはわかったんですね。体は全部白いシーツを被せてはいるが。

この女学生のベッドは、入口でした。そこにはいろいろの薬を置いた棚がありました。四十名くらい入る大きなテントですよ。英語を読めたんでしょうね。それとも使うのを見たのですか、治療から帰って一時間ばかり経つとクレオソートを飲んだんです。そうしたらベッドの上でもんどり返って、ベッドから落ちるんですね。みんなで上げてやるんですが、苦しみもがいて、また落ちるんですね。僕は顔を見ながら、僕と同じ年頃だがなと気の毒でなりませんでしたが、二時間ばかりで死にましたよ。アメリカ兵のみんなに見られて、恥かしくて堪らなかったんでしょうね。そういう例もあるんです。病院に入って却って死んだわけです。

それから、毎日十名くらい死にますがね、全部解剖です。それがまた、中型テントがあるんです。入って行きおったんですよ。それが全部スクリーンがかかってですね、ゴムのですね、手袋はめて前かけはいて、鋸をギイギイさせて、アメリカの医者が、研究ですかなあ、あれ。

それから六月の初め頃から沖縄の捕虜民をつれて来てですね、看護婦の手伝いを見習いさせていました。

僕の場合は、とても恵まれたように思う。四月十五日にやられて、ずっとひっくり返って寝ているんですからね。骨が折れて一つはないんです。もう五寸くらい上だったら死んでいたでしょうが、それくらいですんだんですね。現在村の援護係りの喜納さんなんか、負傷者援護の申請を出して援護を受けなさいというんですが、僕は生きているだけでも有難い、重労働はできなくても、どうにか生きていけるからそんなのは申請しないといったんです。

僕がやられたのは、僕等が歩いている山の方、十メートルくらいしか離れてないところから、機関銃の一斉射撃を受けたので、三人は跡かたもないですよ、僕は戦後じきに行ったんだけれど。自分の父もそこですから、どうにかして遺骨でもと思って捜したけれど、何も無いんですね。

和宇慶から伊集に越える場合にですね、おふくろと親戚の人も沢山ですよ、三十名くらい、みんなが明るい中に行ったんです。やっぱりアメちゃんがおることわかっていますがね。彼等の中から誰かが戻って、アメちゃんがおるということを知らしてくれないわけですよ。また僕たちは、男だから夜越えた方がいい、見られたらすぐ撃たれるよといって、夜越えたら撃たれてしまった。だから昼だったら、一般住民だなと思う場合は、第一線でも撃っていないですね。アメリカさん全然撃っていない。僕は翌日の十時頃見つけられて、担架で、四名で担いでですね、ずっとあのウンミナ、向こうまで連れられて行ったんです。

だから今土地問題なんかお互いにブウブウやっていますが、アメリカはきれいな図面を持っていました。自分の屋敷なんか、これくらい映っているのがありますよ。これ豚小屋だった、これは鳥もいるんだけれどときれいにあるんですね。それから、ここは土地問題なんかよく出ますね、これは豆畑、これは芋畑、これは水瓜といって、畦道なんか全部あるんですね、上空から取ってある地図もあるんです。

それから復員していますね、あくまでも兵隊だったと二世がやるんですがね、僕は二世とはわからんでこれはスパイだなと思ったんですが、これがいろいろ訊くんですね。何部隊であったか、幾つなるの、階級は何か、それで僕は、未青年だった。自分の部落が第一線になったから、夜歩いたためにこんなに負傷している。家族皆いっしょだったが、みんな死んだか生きているのかわからん。だからどうでもいいからやってくれといったら、この二世が親切な人で、よく分った、これからの沖縄を建設するのに、あなたがたが必要だから、きれいに疵を癒して、自分のところへ送るから、これから沖縄を築いて行くんだよ、どうせ戦争は日本は負けるんだから、とその二世がいうわけです。それは四月十七日の捕虜点検の時です。

そうしてすぐ病院に送られて、その病院で、五月になった時は、島尻から日本の負傷兵がいくらでも来るんですよ。一般民はテントの中に、担架もいっしょに入れるんですがね、テントも大きいですから、番によってつれて行きます。それが日本兵だったら、降ろうが降るまいが、そのまま雨にうたして、生きているものは星嘉なんかに送ったんでしょうね。

コザ病院に入院している間に、たしかあれは五月の初旬だと思うんですが、津堅の住民が、安慶田の方に六十名くらい来て、大きいうちに入ってですね、お産するのに夜ちょっと明りを漏らしたために、日本の連隊砲ですか、それが飛んで来て、三十名くらい死んで、十名くらい怪我して、コザに収容されたが、ワアワア泣いていました。それは津堅の人に訊いたら委しくわかるはずです。

それからコザ病院入院中もう一つ変ったことがあったんですがね。それは、十二、三歳くらいの男の子でしたが、この子供は戦争のためか、それとも元来そういう病気であったか、精神異状ですね。病院ではみんな同じく握り飯二つずつですが、この子供はそれも食べますがチューインガムも包み紙のまま、クラッカーも紙ごと食べるし、汚い話ですが、自分の排泄物を全部手ずかみに食いおったです。注射器に牛乳みたいなのを容れてですね、五分くらい待ちませんね、これはアメリカが毒殺です。この子はどっちみち死んだ方が……、まあ言葉もはっきり言えない精薄児になっているようでありましたからね。

大城さんは、これを見ていたですが、「僕も疵がだんだん大きくなるし、こんなにされるんじゃないかな」といいましたね。

病院で一番気の毒であったのは、あの女学生ですね。一高女か、二高女の女学生であったと思うんですがね、四十名くらい入るテントに、ベッドもほんのちょっとしか離れていない、頭をつき合せているんですが、名もききませんでした。アメリカ兵に恥部を見られたことを恥じて、治療して一時間くらい待たないで、クレゾールを飲んだんです。

それから平和館の技師であった大城さんですね。その人が元気だったらあって見たいなあと思うんですよ。その当時はですね、一円でも煙草は一ボール、五十銭でも一ボール、一銭でも一ボール、四角い穴があいた寛永の金ですか、あれでも一ボール。アメリカはですね、とにかくお金でありさえすれば何でも一ボールと換えるんですよ。この人は寝ておって、子供の心配、奥さんの心配をしていましたが、煙草を買い集めていたんですよ。

この人の治療にはわたしはたびたび立ち合ったんですが、疵がだんだん大きくなって行くんですよ。後はこのくらいあいていますね。

よ。背骨はこうありますね。それが全部見えているんです。おかしいなあ、この人の疵はと思ったんですが、僕の場合はまた、毎日こんなにしてしまって行くんですがね。天秤棒で、お米と何かを担いでいましたが、骨を一つ折って抜けていったんですね。一つの骨はなくなりました。

やっぱり捕虜にとられていても、アメリカの軍艦が特攻機に沈められる時に皆万歳万歳と手を拍いて喜んだので、その時は二世がカンカン怒って、それがたびたびありましたね。

家族はお父さんが亡くなっただけで、皆が無事に戦争をしのぎました。お父さんは若かったので、働き手を失ったわけではありましたが、わたしたちも働いたんです。砂辺の浜でアメリカ物資の上げ下しをやったりもしました。

註、　クレオソートを飲んで死んだ女学生は、特志看護婦として学友と共に軍にいたかもしれないとも考えられる。新垣さんの話では、中流以上の良家の子女であったのだろう。治療して一時間程してクレオソートを飲んだというから、その間、恥部を米兵どもに見られた羞恥心と、それに処する苦悶に身をさいなまれ、ついに死を決意したのだろう。親兄弟、成人した家庭、学校、学友などのことも死を決意するには思い浮べたことだろう。また、父母兄弟へ一言でも言い伝えたいことがあっただろうが、それを頼む人もなく、無言で、恐らく、戦争の惨虐を無限大にかよわい体で背負って、死んだのでないかと話の様子から推察される。この病院で死んだものは、住所氏名も不明のまま、大きな穴に投げ込んだことが、当事者たちの話にしばしば現れる。現在、父母兄弟が生存していても、この肉親の女学生の最期、遺骨など知るよしはない。

津堅島の人ちたのことは、記録篇2で調査できるだろう。「日本の連隊砲か」ということは断言できないし、三十名も即死者が出る殺人兵器が何であったか、究明したいものである。

それからこの新垣さんが何心なく話している「日本の特攻機の米国の艦船沈没成功に捕虜の身でありながら万歳万歳で拍手して喜び二世をカンカンに怒らした」という談話は、当時の沖縄全県民の心を現わしたものである。にもかかわらず、戦争中沖縄県民はスパイ嫌疑でいわれない惨酷な処置に遭遇していることが多い。これは、昭和十九年八月三十一日の第三十二軍牛島司令官の訓示、七項目の最後の第七、「防諜ニ厳ニ注意スベシ」が根源でもあろう。その訓示を見て、三十二軍が、いかに視野が狭く、米軍を知らず、また沖縄県民を理解していなかったかを語るものである。これについては、巻頭で委しく解説されるだろうが、ここでも略くふれて置く。

新垣　ヒデ（三十四歳）　主婦

家を守りながら、道具も守りながら、家にいましたが、激しくなりましたので、和宇慶の上に、壕をつくって、そこへ逃げ込んでおりました。そこで四、五日過しましたら、家はその間に丸焼けになりました。それから二、三日過した時に、石部隊がですね、「こっちから逃げて行け、逃げないなら、スパイとして捕えるが、すぐ今逃げろ」というわけですね。それで、いくさのサチバイ（先陣の意、この場合、自嘲的、皮肉の感じがある）になって逃げました。ここから夕方になって、親戚がみんな、いっしょに出かけました。

わたくしの主人は次男でしたが、防衛隊に取られておりませんで、わたくしは女の子二人、一人は十六歳、一人は六歳でした。わたくしの主人の兄さん、長男は区長でありましたから、防衛隊には取られていませんので、長男兄さんの家族が、お母さん、奥さん、兄さんの長男の妻子、それから子供たち、わたしの主人のつぎの弟三男は大阪にいましたがその妻子、そのつぎの四男は防衛隊に取られまして、妻子たちでした。それに、いとこ二家族がいっしょになりまして、みんなで二十三人ですね。

西原にグヤの前というところがありました。郵便局もあるところです。その郵便局の手前に行ったら、友軍の兵隊が、石垣を壊わして横倒しにして地雷を埋めていました。道は狭いのに木も切り倒して道を塞いでいました。地雷はこれから埋めるのか、それとも埋めてしまったのかは作業中でありましたからわかりませんでした。

そこを越えたのもあれば、これから越えようとしているものもおりましたが、わたしは後になっていました。ちょうどその時、わたくしは何心なく、上原の方から赤い玉の大きな火が飛んで来るのを見て、これは何だろうと思うと同時に、足が後に退いて立ち止まったんですよ。

註、　中城湾沿いにつづく平野の西がわ、隆起する台地。北上原、南上原、西原村字上原と北から南へつづく。南上原部落座談会解説にその地勢は書いてある。

そうしたら、少し間をおいて、みんなが歩いているところへ直撃を受けてね、わたしはその後、どれくらいの時間、どうしたかということがわかりませんが、子供を自分の腹から出たものということで、転がって地面の上にいるのを両手で、あわてて立たせたんですね、子供はちっとも動かない。どうして動かないかな、とまたもとのところへ寝かしました。

やがて二人の子供が、何か言っているらしく、どこにどうしていたのか、わたしのところへ駈け寄って来ました。お母さんよう、と繰り返して呼んでいたんだそうですが、わたしには、ぢ、ぢ、ぢ、ぢとしか聞こえませんでした。わたしは爆風を受けて、耳からも鼻からも血が出ました。それは後のことですが、わたしは、お母さんが性（しょう）を失ってあんなにしているのに、お母さんと呼びもしない、お前たち二人は馬鹿な子だと叱りました。お母さんと繰り返して抱きついたのを、わたしがわからなくなっていたんですね。

わたしたち母娘が、ここから早く逃出そうとしていたら、西本門（ざーん）、ソンキの奥さんがどこからどうして来たか、どこでさがしたものか、草刈鎌を片手に持って駈けよって来ました。見ると、一方の手が、下腮で切れて、すじなのか血管なのか、それにぶら下って、ぶらぶらさせているんですね。そうしていうんです。「おばさん、おばさんはイヂ（勇気あるいは気が強い）があるから、これをこの鎌で切り離して下さい」というんです。わたしは、「いやだよお前、お前の手を切り離して、もしそれが血管であったら、血を多

量に出してお前の命をわたしが取ったことになる、そうなると大変だからいやだよ、わたしは」といって断ったんですよ。

そうしたら、おばさん、それではこの子をおばさん貰って下さいというんですよね。それでわたしは、誰もつれていなければこの子を貰って逃げて行くが、わたしも二人の子供をつれて、夫も防衛隊に取られているんだから仕方がないよ。わたしが子供を負わすから自分の部落に戻って行きなさいね、といって自分の部落に帰してやりましたよ。

そうしてわたしは、二人の子供をつれて、性抜けて（本性を失って）ヘンサノスク（西原村字池田）へ行って、兵隊の壕に入れて貰いました。

兵隊の壕にみんな入れて貰ったのに、わたしの夫たちの四男弟の妻と小さい方の子供とが来ませんので、区長している兄さんは、これらは西原の学校にでも行って泊っているのでないかな、それとも艦砲にやられたのか、といっていましたが、夜が明け始めると、わたくしに、お前が勇気があるのだから、シントクをつれて、昨夜の直撃を受けたところまで行って見て来いといって、やられました。

区長兄さんの三男は、シントクといって、部落にいた時は、兵隊の手伝いもよくやっていまして、大抵のことはできました。それで二人は木の葉で頭に擬装して出かけました。

そうして昨夜直撃を受けたグヤの前へ行きましたら、六男浜新屋（屋号）のお爺さんが、顔を石垣にくっつけ、体も胡床をかいたように、やはり石垣に張りつけたようになっていましたが、腰下に大きな穴があいて、腹わたが両がわに飛び出していました。そのすぐ近くには、お爺さんの孫が、真ともに弾を受けたのでしょうか、肉のかけらが飛び散って石垣にもくっついていましたが、骨はどうなったのか、ありませんでした。戦争は盛んですしね恐ろしい中のことで、わたしは女でありますしね、それをよく見ることはできませんでしたよ。弾が後から当って、はらわたを潰したのでしょう、左右両方に出て、石垣に張りついておりましたのはわかりましたよ。

それからまた大通りへ行ったんですが、そうしたら、チヌブ（竹で編んだもの、掘立て小屋などの壁にした）の端から人間の足が出ているので、あれ、これは女の足だがと思いまして、もしかしたら、わたしたちの四男の妻ではないかと思いながら、チヌブを上げて見ました。そうしたら、やはり四男の妻で、片手は切れてなくなっているし、腹は潰ぶれて引きずり出されていたんですが、女の子は、まるで山羊が焼けているように、黒く体も手足もちぢこまらしておりました。

それでわたしは手を合してですね、「いくさ世（戦争という個人の力がどうにもならない時）であるから、お前はその生れ（その運命）であったと諦めなさいよ、お前の残っている子供はわたしたちがつれて行くから、気がかりもしないでね」といって、わたしは、自分の子供をつれておることを思い浮べ、シントク、危いから早く行こうと、立ち去りました。

六男浜新屋のお爺さんたちは、わたくしたちとはいっしょではなかったんですが、みんな戦争に追われて、泡を食って盲滅法に南へ向かって歩くのですが、大通りは艦砲が絶え間なく落ちるので、畑道を歩いたり、路次を歩いたり、弾の中を性を脱けて歩くのです

からどうしていっしょになったかは判りません。そこでいっしょになっていて、艦砲か爆弾なのかにやられたのでしょう。兵隊もやられたということを聞いたが、弾の中を歩いているので、そんなのを見ることなんかできません。

註、　そこの情況を委しく、より正確にしようと四回繰り返して訊ねたが、この程度しか解明できなかった。骨肉がバラバラになり、わずかに肉の粉微塵になったのが見られたといっている六男浜新屋の爺さんの孫を、どうしてわかったか、という質問はしなかったので、話したままを書いてある。六男浜新屋の爺さんと孫は、同じ時にやられたのではないかとも推察される。この二人は路次で、談者たちの通った時に砲爆弾が落ちた場所とは、かなり離れ、しかも石垣に張りついていたという。しかし、委しい実状は解明不能ともいうべく、断定はできない。

わたくしたち二人は、畑の中を歩いたりして、またヘンサの底の兵隊の壕に帰りましてね、長男兄さんに、見たままを話しました。

そうしたら兄さんは、山前幸地の三吉さんを頼んで、二人で死んでいる四男の妻子を埋めに行ったんです。山前幸地の三吉さんは、西原に縁故が多いので、西原の人たちとおるところを、兄さんがさがして、頼んだのでしょう。

兄さんは、わたくしが兵隊の仕事を加勢している最中に、四男の妻子を埋葬って帰って来ました。そうすると兄さんは、わたしに、四男の妻子は埋葬って来た、お前がもの憶えがいいのだから、どの辺に埋葬ってあるので、よく憶えておってくれといいました。

兵隊の壕へ入った時、兵隊から、食糧もないのだから、兵隊の仕事を加勢するなら一日二日は泊めてやるといわれたので、言いつけられて兵隊に仕事をさせられましたが、三日目になったら、大勢だから出て行けといって追い出されました。

それで、めいめいで壕をさがして入らなければならないので、他の人の墓を兄さんと二人で開けて、中には棺箱もありましたが、それなんかも引きずり出して、そこに入りました。そうしたら友軍の何砲といいますか、高射砲ですか、あのドドン、ドドンと鳴る砲、その砲を据えつけたすぐそばになっていたので、友軍からそこは危いから、どこかへ越して行くようにといって、また追われました。

それから、長男兄さんが先頭になって、兄さんが歩いているのについてですね、どこを歩いたかわからないが。そうしたら、喜屋武・照屋（両方とも南風原村）の防衛隊の壕のところに来ていたんですよ。そうして防衛隊の壕に入り込みましたら、これ（同席の儀間さんに顔を向けて顎で示し）らの兄さん、仁徳先生が、防衛隊の伍長でありましたよ。それで、こんな大勢の家族を防衛隊の壕には入れられないから、そばに壕を掘って入れなさいといわれたので、壕を掘って入りました。

そうして仁徳先生は、わたくしと、兄さんの長男の嫁とに、お前たちは防衛隊の手伝いをしなさい、兵隊の手伝いをしたら、たとえ死んでも靖国神社に祭られると言われたので、それでは、どこかで死ぬより兵隊の手伝いをして、死んでしまったら靖国神社に祭られて、天皇陛下におじぎされることにしようねといって、防衛隊の手伝いをしました。

防衛隊は夜中弾運びして働いて、昼は少し眠りますよね。そうし

て働いていますから、日に三度の食事はこしらえて出さねばなりません。

それでわたしが負傷しましたのは、炊事するために水汲みに行ってでした。水は壕の東の方へ汲みに行っていましたよ。そうして一斗罐に水を汲んで、それを二人して棒で担いで、兄さんの長男の嫁は前になって、わたしはうしろを担いで歩いていましたが、その時に爆弾が落ちたので、二人して水を放り投げて、つっ伏したら、初めはここ（後頭部を手で示す）から、裁断鋏で引っ張って突きおこすようにして、取って行きおったよ。それから、わたくしは一時間半くらい、気を失っていたようで、その時に手と胸をやられました。

頭はうしろから剝ぎ取って、皮ごと持って行かれたので、前の方には髪がもじやもじやしたのが少し残っていたが、頭のほとんどが白くなって骨が見えていたそうだ。わたしは気まりが悪くて、手拭いで包んで隠して、当座はものも言いませんでした。そうして、馬鹿になったような様子をしていたんですよ。それが、どうして生えたのか、こんなに毛が生えるようになっています。不思議ですね。

兄さんの方の嫁も腕を破片でやられていましたが、あれは破片をじきに取ってのけました。

わたしはその時、耳も聞こえなくなりましたが、爆風にやられたんでしょうね、この右の耳は聞こえません。この腕に入っている破片ですね、取られるもんかと放ったらかしてありましたが、これ（儀間さんを示す）の兄さんの校長先生（現在越来中校儀間校長）が、「ヒデ、お前は、わたしたちが手伝いをさせていたんだのに、なぜ今にいたるまでそれを取り出さないか」とおっしゃって、昨年の正月にかき出したわけですが、それがどうなっていますのか、わからんですよ。

註、腕と胸の疵跡を出して見せて貰った。手の疵あとは、右腕の前肩のすぐ下、腕の付け根のところで、肩の下腕の付け根共に突き出ているが、それがえぐり取ったようにへこんで、そこのところが変形している。疵跡は縦横大体同じで、十二、三センチくらい。胸の方は、腕より疵跡が大きい。みぞおちのすぐ上で右寄り、いくらか胸の横は長いが楕円形というよりも円形である。腕もそうだが、破片が右横から来て、骨の上をすべって肉をもぎ取って行ったのが幸いして、生命を奪われなかったのだと見た。それがもし、少し角度が前方から来て、肋骨を折って内部へ入っていたら、即死していただろう。筋肉がえぐり取られたと見え、破片が来た右の方向から深く陥没して次第にそれが緩くなって、疵跡の色も焦茶色から、皮膚色へ薄くなっている。頭は、後頭部から皮ごと剝ぎ取られて骨が見え、白くなっていたと話しているが皮ごと剝ぎ取られたのではなくて、後頭部の上に琉髪を結えていたのではなかったかと思われる。それで、結わえている琉髪が爆風で解けないままに、毛根から引っこ抜いで取られたのでないかと推察される。白くなっていたのは間違いではないだろうが、骨が見えていたというのは、白くなっているので、骨が見えていると思い込んでいると察しられる。髪毛が前には少し残っていたというのは、髪が後頭部よりに結わえていたので、前頭部に髪毛が残っていたと思う。頭髪がこのように、すっぽり抜き取られた

例は初めてであるが、首から切断された女の頭が、木の枝に髪毛をからましてぶら下っていた例は、屢しば語られているが、髪毛が談者の話のように、もぎ取って行かれたことも、激烈な沖縄戦の実態の一つである。

わたしは防衛隊の人たちの食事つくりをして、自分は食べなくてもみんなに食事をさせてやったり、兵隊たちが怪我しているのを繃帯を巻いてやったり、兵隊の手伝いをよくやることができました。そこにはわたしの夫もいました。長男兄さんの歩くように、畑道なんか歩いて、弾に当らないように、当てもなく来たら、自分の夫もいる防衛隊の壕に来たわけでしたよ。

そんなにひどい怪我をわたしはしたので、手伝いが出来ないようになったが、あっちに十日ばかりいたですよ。そうしたら、仁徳先生たちは部隊変更になりましたよ。これら（同席の儀間さん）の仁徳先生は、わたしと同級生ですよ。それでおっしゃったんですね。「まあねえ、ヒデ、お前は怪我をしておるから、わたしたちも部隊変更になってどこへ行くかわからないし、兄弟たち親戚たちといっしょになって行くようにしなさい」といわれて、それからが大変な難儀でした。食糧は少しも持たん。ただあてなしに歩いて、島尻の人たちといさかいをやったり、死人の上を跨いで歩いたり、死人のかげに避難した。そうして与座・仲座へ行ったら、あんまり激しいので、人の屋敷へ入って木の下に立ったら、また四男（夫の弟）の長男がやられたわけです。妻と末の女の子はグヤの前でやられて、五人のうち子供三人わたしたちがつれていたんですが、そのうち長男がやられたわけですよ。膝頭から入って股の方に弾が抜けて。わたしは、自分も怪我しているが、枯竹を折って来て、お前は長男だ、わたしはどうなってもいいから、お前はしのがさねばならないからね、といって首を抱いてわたしに凭れさせて逃げましたが、これが今三十七歳になっています。

それからまた八重瀬岳へ行きましてね、そうしたら、右左両方からバンバン撃つので、防ぎようがないわけですよ。それでも、そこではひとりもやられませんでした。わたしたちが行ったのよりちょっと前に「上ノシリー小」（屋号）のおじさんがこっちで死んだと話しておったですよ。

それであまり激しいから、自分たちの長男兄さんは、大変臆病でね、ただふるえて木の陰にしやがみ込んでいるんですよね。それでわたしは繃帯も巻いているが、ゆっくりゆっくり歩いて、壕をさがしたんですよ。そうしたら兵隊の食糧壕に入り込んでしまったんですよ。夜だから手さぐりしたら、箱の四角なのがあるんです。これは弾薬ではないかな、弾薬でも何でもいいから持って行こうと思って、持って行って、兄さんこれ何か見てみませんかといったんです。そうして罐切りで開けてね、そうしたら、あの罐詰になっていました。まるいかまぼこ天扶羅、あれ何といいますかね、そうそうタイ天罐詰でした。

弾薬だろうか何だろうかと思って持って来たんだがね、これが食い物であったから、まあ何という幸せだろう、食う物一つ持っておらない、毎日生命（いのち）とカクガー（いのちをかけて）島尻の人たちと喧嘩して屑芋をほじくって食べねばならなかった。またこれから喧嘩して屑芋を掘って命をつながねばならない。わたしはあっさり死

んでもいいから、お前たち食べて生きのびてくれ、とわたしは食べなかったんですよ。そうしたら、わたしの腹から出た今三十一になる娘が、まだ六歳しかなっていなかったのに、「お母さんが死んではならないよ」といって、わたしを励ますんですね。わたしは、この子に励まされて、心が落ちつきました。

上の子はまだ十六歳だったんですがね。それには着物を少し提げさせて歩きましたが、わたしは、この二人の子供に勇気をつけられて、休んではまた歩き出し、歩いてはまた休むといったあんばいですが、直撃は一坪に二つずつは落ちましたよ。パンパン、パンパンして、早打ちの大鼓をたたいているようで、またパラパラ、パラパラして、それが絶えませんよあなた、もういくさのことは二度と話をしたくありません。

そうしましてね、さまよって歩いていますと、偶然に同じ部落の者といっしょになる時がありますよねえ。仲間小（屋号）の子供がですね、長男といって男の子でしたが、耳のこっち（耳の上）に破片が入ってね、そうしたら女の親は逃げてしまってね、それでわたしが追い駈けて行って、母親の一言を聞こうと待ち兼ねて死に切れないのだろうから、あなたぜひわたしといっしょに行きましょう、さあ、といって、わたしが女の親を子供のところへつれて来ました。

「どっちみち後先きのちがいで、お母さんも死ぬのでいっしょになるんだから、お前はここで、ユーシリトウキョー（死になさいね）」

母親がそう言ったので、子供は大きく呼吸をして、いきが止まりました。年は十六くらいなりましたでしょうね、その男の子供。それから二、三日後に、その女の親もなくなって（死んで）いますよ。

それからは、あれ等とは別べつになっています。そうして喜屋武の近くの壕まで行きましたからね、ここいらにたとえますと、痩せ地みたいなところでした。兄さんは部落に行くというし、わたしは、部落に行くと弾だけが来るのだから行かないといったら、兄さんは、それでは、お前はどこを選ぶかというので、わたしは、どうなろうが、青あおと茂げったところは破片も何も来んだろうから、そこがいい、そこでなければ行かないといって、それでみんなそこへ行きました。そうしたら、上の方にはみんな壕を掘るのをきらっていました。わたしはちょうど、野原と畑の間のそれだけに壕を掘ることにしまして、ゆっくりゆっくり掘りました。みんなは四人ずつ入るように掘ったんです。

わたしは怪我はしていても、みんなより気転が利いていたんですね。三人が体を折り曲げて寝る分はまんまるく掘って、このまんまるく掘ってある囲りに、凹んだところをつくって、湧いて出る水を溜めるようにしました。最初は濁り水だが、だんだん澄むからね。髪を洗う水でも何でもいいからといって、枕辺によ、水を溜めて、兄弟親戚中がこの水を飲んだんですよ。

そうして水を飲んで、四日すごしたら、外は物音がないので、どうしたものかとわたしが壕からちょっと顔を出そうとしたら、壕に人間がいやしないかと見ようとしていたのでしょう、アメリカーと顔を合した。わたしは驚いて、あれよー、わたしは変な人間を見た

ぞ、これだよ、アメリカーというのは、異風な人を見たよ、と子供たちに言ったら、子供たちは、いやだよ、わたしたちのお母さんをアメリカーのところへはやらないよ、というんですね。でもわたしは、友軍の兵隊から、男は戦車で轢き殺して、年頃の女の子は、もてあそぶだけもてあそんだ後で、これも轢き殺すと聞いていたので、そんなことを見せつけられるよりは、自分が早く出て殺された方がいい、といって飛び出て行きました。

そうしたらカマ、カマするので、わたしは幼名はカマだから、「はい」と答えたよ。そうしてカマ、カマして指を自分自身のところへ向けて動かすので、ついて行ったよ。そうしてついて行ったら、ケンリ（キャンデーならん）ギブといいおったよ。それでわたしは、「何をいうんだ、いくさは敗けているんだのに、わたしに何の権利があるか馬鹿野郎」といってやりました。しかしアメリカーは、ポケットから菓子を取ってね、さあ、といってくれたよ。わたしはそれをすぐ口に入れたよ。そうしたら首を傾しげていたよ。それから今度はワラというので、足元を見廻したが藁はどこにも見当らない。「どこにも藁はありやしない」といってやった。そうしたら水筒の水を持って来てくれた。それでいくらでも水をくれようとするので、水をたくさん飲まして、お腹をはち切らして、死なす考えだなと思ったよ。それからしばらくすると煙草を出してやるので、すぐ口へ持って行ったら、ライターで火をつけてくれた。

それで、これはどうも友軍とはちがう、と思った。というのは、具志頭村の新城といったかな、山の中でしたよ。友軍から、鍋を貸せといわれたことがあった。貸せというのは取り上げることで、返すのではないので、いやだといった。そうしたら、お前たちのためにわたしたちは第一線で戦争に出たのに、鍋を貸さないのか、といって小銃を向けられたことがあったよ。それからわたしたちは、小さい子供を三人つれているので、これが泣く時に、いくさの邪魔になるから子供は捨てろと友軍の兵隊にいわれたこともあったからね。わたしに鉄砲を向けた兵隊は上等兵のようであったが、三人づれで、お前一人くらい殺してもわしは罪にはならない、といって撃つというので、わたしは、撃たれている体だからさあ撃ちなさいといったですよ。この鍋を兵隊に取られたら、子供たちに物を煮てくれることが出来ないんですからね。それを思ってちっとも恐くもなかったです。そうしたら鍋を持ち歩くと敵の電波探知機に分って酷い目に遇うともいっていたが、長男兄さんが仲に入ってことはすんだですよ。この兵隊は隊長が来てから叱られていましたよ。この民間の人たちも今は第一線になっているんだ。一般の人にこんなことはしていけないといって叱られましたよ。

そこで皆がいっしょに出ました。わたしは先に出て、段だんのことをやって捕虜になっているのでアメリカの兵隊が皆を出しなさいというので、皆に出るように言ったんです。そうしたら、長男兄さんの長男の嫁が、殺さないか訊いて見なさい、というんですね。それでわたしは、アメリカーの言葉はベラベラ言って何が何やらわたしがわかるか、といってやったんですね。それでも訊いて見なさいというので、アメリカ兵のところへ近づいて行って、わたしは手で首を切る真似をして見せたら、手を振って、ノウ、ノウ、ノウというので、殺さないそうだ、みんな出なさい、といったら、一番臆病

者の長男兄さんと、長男兄さんの三男のシントクが、いきなり壕から飛び出して両手を上げて、万歳、万歳とアメリカーのところへ駈けて行くので、戦さは敗けているのに万歳万歳して出る馬鹿がいるか、とわたしはどなりました。

それからわたしが出たので、今四十余りなるわたしの娘なんか、十六歳になっているのに驚きのあまり、ズロースに糞を出してあったが、それを捨てさせて壕から出したんですが、それくらい驚いて、恐がって臆病でした。今このように悠ゆうと話しをしているのとは、話しになりますかあなた。いくさというのは、この世界のある限り無いのがまし。物も持たれないしね、着る着物も無いしね、捕虜取られてからね、ただ着たきりになったからね、着物を洗うとね、ズロースも洗うとね、その夜は、前も丸出し、着物も着ないで丸裸になって眠って。それから二、三日経って、着物が一枚配給が当ったので、袷であったから表は子供たちに洋服をつくって着せて、裏は自分のものをつくって着ました。

捕虜になると、野嵩へつれてこられたが、そこは飛行場作るというので、一か月ばかりいると古知屋開墾へ移された。あそこへ行ったら配給がない、怪我はしている。十六、七の娘は作業には出されない。娘はアメリカーがつかまえて酷い目に遭はすというので、娘が作業へ出ると少し配給はあるが。それであっちでは、海の藻、草まで食い尽して、ころりと死んでしもうだろうと思うくらいでした。芋かずらの葉もないから枯れた茎まで食べました。

それは二十五人ずつ入る土間に入れられていたのです。

わたしたちの家族は、ほとんど無事に戦争から逃れました。わたしは、与座・仲座の四辻などでは指を折って、皆揃っているかを調べていっしょに歩きました。

おばあさんは、与座で前の小屋において、壕をさがしたら兄さんがお伴しに来るというので残して置いた。しかし戦争は後から追っ駈けて来るんですからね、お伴ができなくて、この家と共に焼けてしまいました。毛布を置いておくと、お伴する時にそれがやりいいからといって、毛布を置いてあったが、その毛布の切れが燃え残っていたそうです。年は七十余っていました。

長男兄さんは六月十九日に、芋掘りに行って、やられていましたが、捕虜になってから美里村ですが、トールガマという壕の中で亡くなっています。平和になって後で、遺骨を取って来ました。

わたしたちの家族では、長男兄さんだけが区長でしたので、兵隊に取られませんでしたが、二男、わたしの夫、長男兄さんの長男、三男、四男、みんな兵隊に取られていましたので、男はいなかったわけです。

和宇慶から逃げ出してから後、三、四か月の間に戦争のために死んでしまったのは、四男の妻と子供、鎌で手を切ってくれといっていたいとこのソンキの妻も、部落の壕で、兵隊に手を切り離して貰ったそうですが、そこで亡くなっておらなくなっています。それにわたしの姑、与座・仲座で焼けて亡くなったおばあさんとみんなで五人が死んでおらなくなりました。ほかの人たちにくらべると、よく助かった方です。それは、食糧あさりもほとんどわたしがやって、みんな壕の中に隠れさせておいたので、弾によけい当らなかったと思いますね。

それからわたしは、二人の子供に疵一つさせないで、夫の帰るのを待っていました。わたくしたちの和宇慶は、津覇へ移動させられていたが、夫と、夫の弟の四男がハワイから帰るというので、巡査の駐在所のところで待っていましたよ。そうしたら、まだ早いそうだ、今来るのではないそうだ、という声を聞いたが、わたしはまだ頭も腕も胸も繃帯を巻いて、頭の前毛だけもじやもじやさせて待っていましたよ。それで皆といっしょに四男が来たので、「はい四男、お前も生きていたね」と抱きついたよ（ここから泣き声に変り出した）。「お前の妻と小さい娘はグヤの前で爆弾で死んだ、残りはわたしたちがつれて生きている」といったら、「有難う」といって、それで「どうしたの、わたしたちのお父さんは」（夫のこと）と訊いたら、「あなたたちのお父さんは、四十五になっていたから避難民といっしょになったと思うが」というので。「それでは、わたしたちのお父さんは、いっしょではないわけか」、「あなたがたのお父さんは、わたしたちといっしょだと思っていたのか」「お前たちといっしょの筈だと思っていた、わたしは北部の山の中でお父さんを待っていたんだのに、お前は、ひとりだけ帰って来たのか」（ずっと泣きながら話す）。

それでわたしは自分の家（当時テント生活だった由）に帰って行って、酒を買わして、まだ一滴も飲んだことのない酒を、飯も食べてない空っぽの腹へ、こんこんこんこん飲んで、涙は眼いっぱい溢れて、それでわたしは酔ってですね、四男のおるテントへ行って、食台をパンパンたたいて、「何んでお前はいっしょにつれて行ったんだ。わたしが、わたしは怪我しているからお父さんは民間の着物と変えていっしょにならないかといった時に、お前の方が、そんなことをしたら兄弟みんな銃殺されるよといって連れて行ったじゃないか、そのくせにお前はしのいで生きのびて、わたしたちのお父さんは死なしたわけか」といったら、「あなたは、ハワイにのぞみをかけていたのか」というので、「もうわたしは体も弱ってしまったし、子供たちもしのがして来たんだが、お父さんがいないでは、暮し方（生活）はならん、わたしは人にも見下げられて、この世の中には希望はなくなったのだな」といって、それから家に帰って、一か月ばかり毎日酒をくらいました。わたしがいなくても、親はいなくても子は育つといってあるんだし、もうお前たちこっちまで生きのびさして来たんだから、お母さんは、お父さんといっしょになるのがいいから、とそんな風に酒を食らっていたんです。

そうしたら、四男がやって来て、「あなたは毎日酒ばかり飲んでいるそうだが、どうしたんですか」というもんだから、「夫がいなくなっているのに生きられるわけがあるか、わたしはこんなに大きな怪我をしていても、二人の子供をしのがしているのに、自分ひとりしのぎきれないでいなくなるというわけがあるか。今からわたしが生きていて何ができるか、人並みくらしもできないで、わたしが生きていると思うか、こんなに生きているのよりか、あっさり死んで行こう、毎日酒を食って死ぬから」。

「お父さんが亡くなったんだから、わたしたちが互に助け合って行くんだし、仕方のないことだから、そんなにしてはいけない」。

「わたしが死んだら、子供たちは、お前たちが養うのは当り前だ」。

そうしたら、「そうは言ってくれるな」と言ってから、「あなたたちの子供は、わたしからは姪子だから子供と同じに可愛いが、わたしの子はあなたの子を扼介者だという考えで、わたしの子供の残飯や残し汁しかすすらないことになるんですよ」と言われたので、わたしは酒食って酔っていたが、それを聞いて、すっかり正気になってしまいましたよ。

「ええ、そういうことになるのか」

それからは、わたしはすっかり酒を止めて飲まんようになりました。

それでわたしは、十六になる娘をつれて、割り当てられた荒地を耕していましたら、津覇の区長さんの呉屋サイジンさんが見て、「ヒデさん、あなたは負傷して繃帯を巻いているのにこんなところしか当らなかったか、開いたところは当らなかったか」といわれたが、こっちがわたしの割り当て地ですからといいましたら、それでは、わたしがあら耕しはして上げるから二度耕しはあなたやりなさいね、といわれて、荒地をひと通り荒耕しをして下さいました。それでここを二度耕して、一畦は植えた時に、仁徳先生に行き合いました。「仁徳先生」と呼びかけましたら、「ヒデさん、お前は怪我をしているが、お前たちのお父さんは居らんようになって、ようくしのいで来たね。お前の方が居らなくなって、お父さんは生きているかと思ったのに、反対になったんだねえ」とおっしゃいました。防衛隊から生きて来た人たちみんなに、お前は亡くなって、お父さんは帰って来たかと思ったら、反対になったんだなといわれて。

そんなにして、豌豆をつくって、一か年ばかりはそればかりをくれていましたよ。そうしたら、六つになる子が、毎日豆ばかりくれるね、といいましたので、お父さんがいないからとは言われませんよね。それで余所の畑へ、掘った後に取り残した芽芋（取り残した芋）を取って来て、ウムニー（芋を煮てつきくだいてねったもの）でもつくってくれようと思って、上の娘をつれて、芽芋をほじくりに行きましたよ。

その時、伊集の部落にはアメリカーがおりましたが、わたしたちは、伊集の部落をうしろにして、西に向かって芽芋をほじくっていましたよ。そうしたら、そこへ真っ赤な顔のアメリカーが飛び出して現れました。「あれえ、話にしか聞いたことのないアメリカーが来た。大変だ、一大事だ」、とはじめはイルソウ、モ、ソウ抜けて（驚きの形容）おったが、わたしは心を落ちつけて、「驚くなよ、よし子。おかあさんの考えでしのがしてやるから、驚くな」といったんですが、その十七になる娘を捕えて、アメリカーがこずいていましたので、わたしは方言で、「お前がそんなに、こずいてもこんなところで何もできるか」といったら、ひとりが、わたしのところに来て、首を抱いたんですね。わたしは呼吸もしなかったですよ。それでわたしの首を抱いているのだから、腋毛が見えますよね、それで赤いので、わたしが手でその腋毛を二、三度撫でて、わたしたちのものとは似ないといった気持ちを示したら、似てないというふうに思ったようでした。そうして、「ポス、ポス、OK」というわけです。わたしは意味もわかりませんが、わたしはポス、ポス無いと言いました。

そこは伊集の入口の拝所の上の山の中でしたから、わたしは、ここよりもっといい場所があるからあっちへ行こう、といったら、ウ

エルウエルしていたよ。それでわたしたちは山道をよく知っていますよね、それで、高い土手を二つ駈け越えて走ったら、あのアメリカーは、おーい、おーい、呼んでいたよ。それでそこから飛び出て、小さい丘を二つ越えて行ったら、下からジープが来ていますよ。それで、あっちに行くからというふうに手でやったら、わたしたちが来ると思ったんでしょう、素直に行きましたよ。そうしてわたしが今からお前たちにつかまれるものかと、言っていると、ちょうどそこへMPが来ました。そうしてわたしたちは、巧く逃げることができましたが、その時、三十五号線に出たところで仁徳先生に会ったわけですよ。そうして仁徳先生が、お前も生き抜いたな、あなたも生き抜きなさいましたなと、言葉を交してから、わたしは、わたしを治療して下さった赤十字の仲間先生もお元気でしょうかと訊ねましたら、仲間先生は戦死されたとききました。

「ああ、わたしを助けて下さった仲間先生は亡くなったんだな」と悲しく思いました。仁徳先生とは同級生なんですよ。

註、　新垣ヒデさんの話は、全部沖縄の方言でなされた。首里・那覇に近い関係で、わからない言葉はないが、沖縄方言には、なかなかユニークなのがあって、共通語で的確な言葉が容易には見出し難い。それで直訳できないので、意訳のところもある。新垣さんは話しを聞いていて、情熱家だと、言葉や話し方から感じるが、歯に衣を着せず、ずばりと露骨なことも言ってのける。捕虜になって、着ている着物を洗い、ズロースを洗ったら、沖縄方言のそのものずばり言ったのであったが、女陰のことをわたしは「前」という言葉を当てた。アメリカ兵に、危く酷い目にあう時にもポス、という言葉を言ってのけ、同席の人たちは苦笑した。それも終戦後、米兵間に流行った女陰をいう言葉であったらしい。

繰り返して重復したりするところはあったが、沖縄方言での表現は、なかなか巧い。方言の語彙が多く、歯切れもいい。したがって共通語への訳は難しく、その巧さが充分に訳せないのは残念である。情愛もよほど深いことを現わし、夫の死んだことのわかる時は、終始泣きながら話した。

方言を共通語に訳したのは、新垣さんが最初なので、後のちの、何かの参考になるかとも思うので、実際話された方言を添えて置くことにする。これは、いろいろと迷って、四、五枚方言を出して、それを訳すことにしようと思ったが、テープから移して、読んで見たら、当事者のわたし自身、なかなか読みずらいので、その計画を止めて、終りにその最初、原稿用紙の一枚だけを出すことにする。

新　垣　ヒ　デ（三十四歳）　主　婦

ヤー守ヤガナー、道具ン守ヤガナー、屋ンカイ、ウヤビータンヨー。居テ、屋ヌ、ナーハゲシクナタクトヤーフー、オーキヌ上ナカイヨー、壕シコーテヨー、ウマンカイ、ヒンギテンゾービータンヨー。ウマンカイ、四、五日バカーン、クラスンデ思ーネ、屋ヤムルケー焼ッテネーンヤーフー、ムル焼カッテ二、三日クラチョーネー、石部隊ヌ兵隊ヌヨーフー、「ウマカラヒンギランアラー、ス

パインチカチヤミークト、ナマフィンギリ」、ンデイルバーテー、アサーネ、ムル、イクサヌサチバイナトウテ、フィンギヤビタンヨー。

アンシ、フィンギテ、ハジメー、グヤンメーナーデーヤーフー、グヤヌメーチチヤビタクト、グヤヌメー、アッチュンリチシーネーヤーフー、ナーヤガテイグヤヌメーヌ、郵便局（ユービンチク）イカンディスットクルンヂ、友軍（ユーグン）ヌ兵隊（フィータイ）ンチヤーガ、石垣（イシガチ）クーサーニ、横手（ユクテ）ンカイ、ウチェール石垣（イシガチ）、クイユン。

新垣　カシミ（四十二歳）　主婦

わたしたちは、昼は壕にいて、夜は家にいましたがね、わたしの家にいる兵隊が廻って来て、おじさんおばさん、家も諦めて、何もかも自分のものと思わないで、島尻に親戚があるなら、早くあっちへ行った方がいいですよと言われたので、すぐ東風平村の友寄へ行きました。夫の一番の友達の家を頼って、そこの壕に入れて貰っていましたが、避難民だから、あわてて越えて来たんですね、それで食べる物を持っていないから、しばらくそこにいたら、女主人が出て行けといいました。出て行けば死ぬし、命をしのごうというので来たのだから、そこにとどまっていました、ところがそこのお母さんは悪（あく）（悪い人の意）で、お父さんはそうでないが、首里の人なんかが壕の前を連れ立って行っても、「首里の人間が何でわたしたちのところへ来くさって（チークァテ）そんなに来られては、友寄の人は屑芋さえも食べられなくなる」とわたしに当てつけて言いました。それでわたしは、心に当って言いました。「ねえお母さん、戦（いくさ）が終ったら、わたしたちの芋を掘って、馬車のいっぱいずつ持って来るから、そうは言って下さらないで」といって、わたしは泣かされましたよ。

そうして二十日くらいおりましたが、後ではあっちの部落の防衛隊をつかって、こっちから行ってしまわないなら、竹槍で突くぞ、突くぞといって、脅されましたが、そこの壕はいい壕でありましたから出るのは惜しかったんです。それで、何といわれても蹲（つんぼ）になって居ろうとしたが、仕方がないでそこから出て、同じ友寄の字に自分たちで壕を掘って入りましてですね、三人でいました。そして飛行機が上る時は、南京袋で作った着物を着て芋を掘じくって来ました。塩は、あのお母さんから三十円出して、小さい瓶の一杯買ってありましたよ、それで、他人の畑からほじくって来た屑芋を煮て、それに塩をつけて食べていましたが、また防衛隊に追われて、東風平の同字に行きましたよ。同字というのは八重瀬岳の下であります。そこで焼け残りの家がありましたので、それに入って、三日間生活しました。それで段だん激しくなりますよね、昼も夜も撃ちつづけですから。そこにもいられないと思っているところへ友軍の兵隊が来て、おじさん、おばさん、これも大切、あれも大事といって重い荷物を持って歩いたんでは、当らない弾も当らねばならないからこれからは何も彼も放り棄てて、体一本しのぐものなら、パラパラ、パラパラやって来ても溝のそばにでもどこにでももぐってしのぐことができるから、生命さえしのげば、人民は殺さないはずだから、命をしのぐ考えをしなさいというので、はい、といって発動機のある部落へ行きましたよ、与座です。それであっちに行ったら、兵隊になっている甥が壕の前に並んでおりましたよ。それでわたしの主人が、元気だったかといってから、わたしたちは、発動機のある建物にいるから夜になったら来なさいといった。そうしたら来ていましたよ。そうして、おじさん、おばさん、今夜の中にここからは去りなさいよ、という、どうしてそういうかと訊いたら、今夜からここに砲台を敷くからという、砲台を敷いたら大変かと訊いたら、砲台を敷いたらあっちから返しの艦砲が来るからという、ああそうかといって、薄暗い中を真壁村の同字へ行きました。同字へ行きましたら、あっちもおなじく激しいんですよね、そうしてそこから前に歩いて、大渡へ行きましたよ。大渡も同じく激しくて、今度は後に戻って、糸満の名城へ行きましたよ。またも同じく激しくて、行くところはどこという差別はなくて激しいんですが、その激しい中に、焼け残った小屋なんかに入って、二、三日くらいずつは泊っていますよ。また、名城があまり激しくて、いられませんので小波蔵（名城とつづいている）へ行きましたよ、小波蔵へ行きましたらここも全滅みたいに人間が弾に当って死にますよ、片っ端しから。さあこっちもそんなに激しくなっているもの摩文仁に行って見ようということで摩文仁へ行きました。夜暗い中をいつも歩いてですよ。摩文仁へ行ったら、摩文仁字の人が、焼け残った家畜小屋を出たり入ったりしていたので訊いたら、この部落は井戸というのはない、海岸の浜辺に一つしか井戸はないといわれたので、水がないではいられないといって、また米須の部落に戻りましたよ。そうしたら兵隊たちは戦車の下や、またあちこちに隠れていますが、こっちも弾は降るように落ちますよ。それでこっちも激しくなっているし、さあ、また真壁同字へ戻ろうといって、真壁へ行ったら、怪我している兵隊が、おばさん井戸に行くなら水汲んで来いとせがまれるので、可愛想になって水を汲んでやりましたがね。そこから、また糸数に行きましたよ。糸数がまた激しくなりましたから、今度は国吉、真栄里へ行きました。同じ道をぐるぐる行ったり来たりして、どこが安心かなと思って。

国吉、真栄里もまた、三男小亀ズー（屋号）たちは、娘が怪我したから、死ぬことの恐さを知っている十三、四になっている子供をさへ捨てて逃げて行くんだから、わたしたちもここにはおられないといって、ここを出てまた糸数へ行きました。そうして糸数では、それから壕といってはないので、各自焼け残った小さい木の下などにいますよね、顔だけ被うていればいいといったあんばいでですね、それでわたしが、うちのおとうさん、わたしの夫にですよね、言ったんですよ。あなたが死んでもわたしたち二人は死ぬんだし、またわたしが死んでもあなたたち二人は死ぬんだし、ねえお父さん、今三人揃って生きている時に、三人で手を挙げて捕虜になりましょう、宣伝ビラには、殺さないといってあるんだから、といいましたら、うちのお父さんは、「お前はそれくらいしか物は思ってないか」といいました。それでもわたしは、宣伝ビラが落ちる度びに拾って、殺しはしないと書かれている、といいまして、さあ、手をあげて捕虜取られに行こう、夜出ると殺されるが、昼は殺さないそうだよ、とわたしは夫を説きましたよ、そうしたらお父さんもわた

しのいうことにしたがって、わたしたち三人で手をあげて捕虜取られるようにしました。そうしたら、わたしたちについてあの家からもこの家からも、みんな飛び出て千人ばかりも来たわけです。その時、空にはアメリカの飛行機が飛びつづけていました。どこへ行くか、逃げはしないかといってですよ。機銃機が旋回しつづけていたのです（機銃掃射する飛行機に機銃機と避難民は言っていたようである）。

そうして糸数越えた山からは、髭の長い長太刀を提げたアメリカーが二人飛び出して来て、避難民は千人ばかり並んでいますが、一人は前、一人はうしろから、並んで歩かしているわけですね、そうして、糸満のコーグ料亭まで歩いて来ました。コーグ料亭の焼け残った建物などに黒ん坊やアメリカ兵などが大勢いますよね、わたしたちが行ったので、それがみんな飛び出して来ましたよ。

避難民は少しずつは、荷物も持っていましたよね、わたしたちもそれに、少しばかり最後のために米を持っていました。それでわたしは、お父さん（夫）に言いました。

「うちへ帰ったら、この米でお粥をつくって食べて、体が弱っているから、当分は畑も耕さないようにしましょうねお父さん」。

その時は、ハワイ二世の子供のいるハワイ帰りの井口のじいさん、ばあさんもいっしょでありました。

わたくしたち千人ばかりの避難民の捕虜たちは、自分の荷物の上に坐らされていましたが、一人の兵隊が、トーニ（厚い板でつくったり、木を刳り抜いたりした矩形おもに豚の餌をくれるものとして作られる）に水を汲んで来て、杓子を持って避難民たちへ飲めという、毒が入っている、死なそうとしているといって、みんな飲まないよね、それで兵隊がうまそうに沢山飲んでしまったら、それを見てみんながさっと、先きを争って、人を突き飛ばしても飲もうとしました。

水をそんなにみんなが飲みますので、その兵隊は、干パン箱がありますね、それをたくさん持って来て、それを一人ひとり四個ずつ配ったが、毒が入っているよ、食べてはいけないよ、というので、誰も食べるものがいない、その兵隊がわたしの手から二つ取って食べたので、またみんなが、ねだり勝負といった格好で、もっとくれと、ねだっていました。屑芋と豆粒をほんのちょっぴりずつしか食べておりませんから無理のないことだ と思うんですね、わたしたち、もう米といってはいつ食べたかわかりませんし、屑芋をほじくって来て、塩をつけて食べて来たんですからね。

それから男たちには赤玉（ラッキーストライキ、包紙に赤い丸があるのでそういった）を配っていました。そうして、あれからもこれからも取って、ライターで火をつけて自分も吸って見せました。それで男たちは、また女も立って、くれなさいというのです。くれといったら、二本ずつくれた。戦争に追われて、煙草の代りに松の葉を吸っていますよね、

そうして、それから、またアメリカーが前になって、ついて来いというので、歩き出した。そうして豊見城村の伊良波へ行った。

伊良波へ行ったら金網が張ってある、そこにわれわれは放り込められた、千人ばかりのものが。一晩はこの浜辺に寝た。

炊事場には、沖縄の男の捕虜たちがいて、その人たちが炊いた玄

米飯をハーバー、ハーバーして（早く早くといって）くれられた。それから座安海岸につれられて行った。そうして海上トラック（上陸用舟艇であろう）に乗せられたわけだが、陸で殺すと道ヤマガイ（塞ぐ）だから、海の中で沈める考えだろうから家族は皆いっしょになって行こうと言った。こんなたくさんのシンカ（グループ、あるいは単に人々）千人ばかりの。

海上トラックに乗って海の中へ行ったら、軍艦があるわけですよ。そうして海上トラックのまま軍艦の底へ入って行った。海上トラックの上で、そうめん罐詰二個とカンパンとが渡されました。それでみんなが、海の中で沈める考えではないらしいね、と話し合いましたよ。海の中に捨てる考えなら、軍艦に乗せないで、海上トラックで沖に行くだろうし、罐詰なんかもくれないはずだ、というんですね。

そうして軍艦では、兵隊は二階に、わたくしたちは下にいるわけですね、わたしたちの上が四角形に、あいていますが、兵隊がそこから顔を覗かして、一つの手には赤玉煙草を持って、ほかの手には沖縄（日本）の一円札を持って、「これをやりなさい、そうするとこれをやる」と手真似を二階でやります。みんな煙草には飢えているのですから、買おう、買おうといって買いました、海の真中でのことですよね。

それから、アメリカ兵は、今度は櫛と一円札を持って、換えよう換えようといっていましたので、川端小のお母さんは、自分の主人に、わたしはもう二か月も髪をくしけずったことがないで、こんなに髪が くちゃくちゃになっているから、お父さん、買いましょうよ、といったら、主人は、海の真中でさえ、こんなに店が繁栄しているくらいだから、上陸したらどんなに大きな店があって、櫛なんか安くていくらでもあるかしれない、今買わなくてもいいよといっていました。

それでその軍艦は、われわれをどこへつれて行ったかといいますと砂辺の浜につれて来たのですよ。また海上トラックのまま、浜辺につけましたね。

それから歩かされたが、普天間のあたりがぜんぜんわからない、わたしは、普天間の樋川がわかったので、みんなに、ここは普天間の樋川だよ、と教えてやった。そうして、宜野湾村、今の宜野湾市の野嵩へつれられて行った。そこで人員検査があって、一つの家に百五十八人入れてありました。

野嵩でも苦労しましたよ。人員しらべができないで、一週間ばかり配給物がちっとも無いんですよ。それで田の草を、あるだけは全部食べてしまいましたよ。芋かずらは、下葉まで食って何もないし田の浮草も全部食べたし、もう食べられるものは、どこにも見つかりません。それは、伊良波でしらべて、何一つ持たさなかった、体一本で来たのであったから、こんな捕虜取られて、いやでしたね。

わたしたちがいた家は、何という家でしたか、あんまりひもじくて、水でも飲もうとしましたが水もありません。水さえ飲まれないので、島尻のお母さんたちは、こんなにして捕虜とられるよりは、この家に爆弾が一つ落ちれば、全滅して極楽だがといいましたよ。子供たちはひもじいといって泣くし、煮ようとすれば煮るものは何も無いし、配給物はぜんぜんない。野嵩は捕虜を集めては、北部の

方へ送る。そればかりくり返して、配給はちっともないのだから、芋の葉もなければ田の浮草も食いつくして何にもありませんでしたよね。

わたしたちの子供は、せっかく戦争からはしのいだのに、田の草ばかり食べさせたんですから、腸チブスになって、野嵩で死んでしまいました。

わたしたちは、最後まで野嵩に留まって、ここ（和宇慶）へ帰りました。

註。　新垣カシミさんの話は、極めて淡たんたるものだが、戦争の様相を想い描かされる。ところどころ変ったことがある。戦争をしのがした息子、しかも一人息子が捕虜になってから腸チブスで死んだというがこれは栄養失調と腸害であろう、野嵩に腸チブスが流行った様子はない、ただ一人だけ腸チブスにかかったとは思われない。

儀間トヨ（十九歳）　軍の看護と壕内炊事

わたくしはその頃、女子青年団長をしていましたが、軍から、女子青年を集めて下さいと言われましたから、和宇慶から七名、南浜からも四名集めて、それで今の崎原小というところに部隊がありまして、そこに十五日ぐらい、兵隊の炊事をしていましたが、山の方に敵が来たんです。それで兵隊が雙眼鏡で見て、敵がそこまで来ているから、あなたがたは、もうここに残っていてはいけないと言われました。それでわれわれは、棚原の野戦病院に行って、負傷兵の看護に当ろうと思って、行きました。そうして、棚原の野戦病院の入口で、わたしたちも壕に入れて、負傷兵の看護をさせて下さいとお願いしたんです。そうしたら、伍長さんでしたかね、もうこっちも激しくなっているから、あなたがたは、下った方がいいですよといわれたので、そこを出たんです。

それからやはり同じ西原村の幸地に行きまして、三名ずつ別れて壕に入っていたんです。そうしたら馬を持った兵隊がいたんです。それでこの兵隊から「あなた方、何か加勢ができたらやって見ませんかといわれて、運玉（西原村、与那原町、首里、南風原の四町村に挟まれた岳）から、爆弾を運ぶことになりました。それは十キロ爆弾ですが、それを各おの背負って、必ず一人びとり縦に一列になって歩きなさいよといわれたものですから、その通りにして、二晩、幸地へ運びました。そうしたら、あなた方は、もういいから下りなさいね、といわれたので、それから浦添の前田の壕にちょっとだけ寄ったんです。そこに二時間ほどいましたが、とても激しくて入ることはできなかったんです。それからはもう自分たちは、どこへ行けばいいのか、行く道がわからないんです。そこで仲間の婆さんは最初からわたしたちの壕の隣りにいて、その婆さんの孫に当るのもいっしょでありましたが、お婆さんが首里に行こうね、といったので、首里に行って、わたしたちは、首里城の壕に入りました。

首里城は、二階は参謀とか、それとも他の偉い方がたですが、室がありましたが、一晩泊めて貰って、こっちからまたイナ御殿を通って、一日橋といったんですがね、津嘉山を通って、それから前川まで行ってから、東風平村の同字に行って、山部隊に入りました。

それで炊事の手伝いをして五日間ぐらいおりましたがね、水汲みに行く時に直撃を受けて、田圃に落ちたんです。そうして水の中に匐うておりました。その水汲みの途中に、直撃を受けて、首だけが体から切れてあるのと、女の髪だけが抜けてあるのを見ました。

それから与座（高嶺村）に行って、与座から真壁に行きました。真壁には千人壕というのがありますが、そこへ入りました。そこには民間の人はいなくて、全部兵隊だけが、たくさん入っていました。そうしましたら、アメリカから、入口に迫撃砲を撃ち込まれて、壕の枠が壊わされて入口が塞がれて、出入りができなくなりましたが、アメリカの撃ち込んだ迫撃砲（迫撃砲だけでなく火焔放射機などの攻撃も受けたのではなかっただろうか）のために、ここで友達が一人焼き殺されて死にました。

それでわたしたちは奥の方に入って行って、ここで大勢いっしょに生活していました。その壕の奥には水もありました。二十日ぐらいその壕で生活していました。負傷者は入口で全滅ですが、友軍も奥にいました。

その千人壕からちょっと離れたところに、壕がありまして、その壕に移りました。そこには民間も友軍もごっちゃになっていましたが、この壕も大きくて何百人も入れるので、ずいぶん大勢の人がいました。友軍より民間の人がずっと多かったんですが、そこで大変なことを見ました。

四つか五つになっていたかもしれませんが、男の子がおりました。その子は親がいないといって泣きました。子供は入口にいたんです。壕の上に穴があいていました。それで友軍の兵隊たちが、この子供の泣き声が、こっちから敵に聞こえる。泣き声が聞こえたらわたしたちも大変である。この子をどうするか、親はいないか、といいました。兵隊たちのこえに誰も返事をするものがおりませんでした。それで兵隊たちが中の方に入って行ってやったんです。何ぜか少し明るかったんですね、上に穴があいていたからか。連れて行って三角布で首をしめたんですが、これは大きいから死なないんだ、もう少し細いのをといって、その三角布を引きさいて細くして、またしめ殺しました。それを民間の人は見て、みんな泣いていました。首をしめるのは現に見ましたが、恐かったものですから、最初だけ見て、最後まで見ることはできませんでした。

それからその壕を出て、また千人壕に行きましたが、いっしょに行ったのは六人で、最初は十一人だったのが六人残ったわけです。

その壕に移ってからの生活は、夜になるとアメリカの部隊の引っ越したあとに残飯らしいのがあったんです。そうして、カンパンの開けられたのも取って来ました。

また、夜池の方へですね、歩いて行って、浴びました。知らぬ間に虱が出ているんですから。八月の十五日までその壕で生活したわけですが、食べるものは、アメリカの兵隊がキャンプをつくった後に残したものを友軍の兵隊もわたしたちも行って取ったんです。芋なんかも掘って来て、食糧はそうまで苦労しませんでした。

八月十五日に、友軍の兵隊が来ていました。もう戦争なくなっているから、出た方がいいですよと来ていたんです。それで捕虜に取られましたが、その日は、太陽の光がチラチラして物が見えませんでした。

わたくしたちは、下はモンペですが、上は軍の開襟シャツでありましたから、出る前に友軍の兵隊から軍服なんかつけない方がいいよといわれて、軍服を捨てて、民間の服に換えました。友軍の兵隊というのは、友軍の兵隊は、壕の前の方にいたのが先きに出て、その兵隊たちがいつ出たかわかりません。わたしたちは奥にいた、岩ですからね、岩の中に坐っていた。この壕はどこまで通っているかわからないそうであります。

食事は軍といっしょですから一日もひもじい思いをしたことはありません。淋しいとか、何とか考えない、ただ生きているということだけが考えられた。

この戦争で、目の前で死んで行く人も見ました。後に迫撃砲が落ちたのに、出撃へ出る兵隊たちも見ました。

兄さんは、さっきおばさんが話していました防衛隊で、学校の先生でありましたから、自分の家にはいませんで、学校の部落に分家していました。

わたしは、壕を出た時に、沖縄の人は全部戦争で死んでしまって、自分たち六人だけが生き残ったんだと思っていました。それで、兵隊にも生き残ったのがいるし、民間の人もいるので、生き残っている人がいるとは夢にも思っていませんでしたので、意外に思いました。

それで捕虜になって石川につれられて行きまして、糧を敷いて六人が寝かされていましたが、自分のお父さんお母さんも、生き残っていると思って、知った人にあうといつでも訊いていました。そうして親戚の方に訊いて見たら、

「あなたのお父さんやお母さんはわからないよ」と言われて、その時からがっかりして、それから妹や弟が一人は生きているだろうと思って、孤児院などをたずねて見ました。孤児院はあの頃、蒲原といったですかね、あっちにありました。

どこをさがしても妹や弟も見つかりませんので、美里村の桃原で親戚のところから作業に出ました。

石川にはちょっとの間しかいませんが、美里には長らくいました。津覇にはいつ来ましたかね。津覇に来たら和宇慶に家族はもういないんですからね、わたくしひとりだけだから、兄さんの奥さん首里の生れで首里へ行っていましたので、わたしは馬車持ちを頼んで、兄さんの奥さんたちを連れ戻して来たんです。それから二か月ぐらいして兄さんはハワイから帰って来ました。

わたしは作業に出ていて、兄さんが帰ったら煙草の不自由をさせないようにしようと思って、煙草を買って、アメリカーに見つけられないように、床下に隠して置きました。

兄さんが帰られて、最初にあった時は、わたくしは作業に行って、五時に食事させてから、それからあとかたずけをしてからですから、六時頃になっていたと思います。

兄さんの長男は大変痩せてですね、生きるか死ぬるかのほんとに危険の状態でありました。まだ誕生になっていません。四番目がこの子ですがね。

「よかったね、あなたがここへ連れて来て、栄養も与えて、生きのびさせてくれて、有難う」といいました。

兄さんの奥さんや子供たちは、北部に疎開させてありました。上

が当時六歳だったんです。四番目が男の子です。年子で四人でしたが、奥さんのお母さんといっしょでしたが、お母さんはあっちで亡くなって、長男が生きるか死ぬるかといった痩せ方をしていました。

津覇での家はテントですからね、テントの下を上げたり下げたりして出入りしました。四軒ずつ一つのテントに入って、共同生活です。

わたくしは軍の炊事で六時頃に帰りましたから、兄さんは、お父さんお母さんをはじめ兄弟たちがいなくなっていることは、お姉さん（兄嫁）から聞いて知っていたはずです。わたくしも、兄さんも、あったらものも言わないで、泣きました。兄さんも長い間泣きましたが、後で、「よく生きていたね、あんな戦争の中から」といいました。

わたしは兄さんのことは、一月橋のところで、喜屋武、照屋の壕にいるということを聞いたんですが、あいはしません。

「わたくしは兄さんが生きて下さったことを大変嬉しく思います」とだけ言いました。兄さんとあって、自分も生きているということを感じて、ほんとに嬉しく思いました。

お父さん、お母さんたちを誰も見たという人はいません、この前の二十五年忌にですね、はじめて伊集の方が、「あと一時間ぐらいっしょであったら生きていられたのにね」といわれましたが、この方たちは一時間ぐらいして捕虜とられたそうです。父は馬を引っ張っていたそうですが、この馬を置いて来るまで待っていてね、といって行ったそうですが、行って来るまでにやられてしまって、お母さんは、みぞ落ちから上半分が吹っ飛ばされていた。あなたがたにそう言うと心を痛めて驚くからと思って言わなかった、といいました。それで遺骨はぜんぜんわかりません。和宇慶の壕から伊集の壕に移っていたようです。この方たちもはっきりはわからないが、多分お母さんであっただろう、といいました。こっちの方も非常に激しかったですから。西原でなかったかといって、西原へも遺骨をさがしに行きました。どこであったかわかりません。その時父は五十五歳でした。

わたしは、お産のたびに母のことを思い出します。お母さんがいたらなあと。わたしは男の子はこの子一人です。女の子は七人できています。

註、男の子の上の子が生れた時、羊水過多症で破水したので、急を訴えているところへ同席の新垣ヒデさんが偶然にそこへ来合せて、あわててあちこち走り廻った話が出た。

また、兄さんが帰られない間は、一人きりで寂しかったでしょうと質問したら、新垣ヒデさんは、自分の主人の弟の孤児三人が、親がいなくなったので、へこたれるのではなく、反対に生存に対して力強く立ち向かう例を語った。

新垣三郎（四十七歳）　字供出徴用係

命令を受けまして、徴用と供出の係りを命じられて、専らこの事務をとりました。こっち（字和宇慶から伊集へ至る平地の西がわ丘陵地帯）に山がありますね、大体この辺の陣地の係りだったわけで

す。

この部落には石の五中隊、本田光雄という人がおりました。それから南上原の方には、岩瀬という名古屋の出身の隊長がいました。

それでこれ等の隊へ、いつも馬を借りて、供出したり、また人間の徴用をしてずっと協力していたのであります。

ところが、四月一日にアメリカが上陸したと聞きましたので、上陸したとなれば、妻子をどうにかしなければならないと考えて、池田の方へ行くことにしました。

家族は、長女と次女は軍に行って、一人は石部隊、一人は球部隊に従軍していましたので、われわれ夫婦と長男、次男、三男、四男に三女七人が池田へ行きました。池田へ行くと、そこで墓をさがして、墓の中に入ったんですよ。ところがその墓の天井がですね、ひびが入っていて非常に恐かったんです。墓の後の方には、野砲であったか、大砲が据えつけられていましたが、時どき艦砲も来るんですね、天井が壊れはしないかと心細いので、よしここから出ようではないかといって、大里村の湧稲国ですね、そこにうちの隣のおばさんが向うに嫁いでいましたので、その人をたよりにして行きました。そうしたら、砂糖やいろいろ世話して貰い、野菜などもそのうちから持って来たりしてくれたんですが、壕といってはありませんので、昔の砂糖小屋がありますね、あの搾り殻を上から被せて、下にもぐっておったわけです。それで雨が降る時は、下は水がつまるんですからこれではいかん、子供等が危いからと思って、わしはあちこち歩いて、湧稲国の東がわの山に、部隊名は忘れていますがね、そこに隊長を訪ねて、軍の空き壕があったんですよ、しばらく貸して下さいとお願いしましたら、心よく貸したんですよ。そこに子供等をおいて、自分は、「シンリュウ」という同じ部落の人と力を合しまして壕を掘りました。それから壕が完成してまた兵隊さんにお願いして引っ越すことにしました。しかしその時、兵隊さんに何にも御礼ができなかったですが、幸い、馬肉がありましたので、三斤ぐらい買って兵隊さんに上げて、今後もよろしく御願いしますといって、子供を引き取って、二家族共新しい壕に入ったわけですよ。それでそこで夕飯も炊いて食べましたところ、その壕は、急の一時しのぎの壕ですから、掘り抜きしてなかったんです。それでどこからどうして入ったものか、瓦斯が充満して、呼吸も止る心地で非常に苦しかったんですよ。空気の流通がないんですね、それかといって外へ出たら危いですから、壕の入口にみんな寄っていました。

そうしたら兵隊さんたち五、六名の靴音がしたんです。それで彼等はこの新しい壕を目がけて、入って来ましてね、「出れ」、「すぐ出て行け」、来ると最初から怒鳴りつけて威嚇するんです。「こっちは軍が必要だから早く出て行け」そういうのでわたしはお願いしたわけです。「まあ、せっかく命をしのぐためにずっと中頭の方からこっちへ来て、今日完成して今入ったばかりですから、兵隊さんは、どこでも壕はさがすことができましょうから、これだけはまあ見逃がして下さい」とお願いしましたが、「お前は言うことを諾かないなら引っ張り出して牛馬のように使うようにするぞ」とますます威嚇がひどいんですね、それで仕方ないからわたしも考えて、兵隊と争っても仕方がないから出ることにした。そうしたら今度は、

道具も、敷き物も全部そのまま置いて行け、というんです。それでわたしも、心を強くして、「これだけは決してできません」と口答えやりながら、道具をまとめて、束ねてしまってね、夜だから一人ひとり出して、人の家の離れの小屋で、艦砲でも来ると、一家全滅だがと思いつつそこに泊って、翌日になって、屋宜原（大里村との境内、在で、東風平との村境に当る）に行きまして、人の家の離れ小屋に、お願いして入っていましたが、それから壕をさがして、そこに住んでいました。

屋宜原にいた時ですが、隣に豚をつぶしてあるというので、子供たちも食べたがっています、またわたしも欲しいのですから、買いに行って、わずかばかり買って帰ったんですがね、そうしたら、わたしが帰って来る間に十三歳になっていた息子がやられてしまっているんです。頭のここ（耳の上）を弾に当って、家内がそれを前にしていましたが、わたしが来た時には、もう、うんともすんともいいませんでした。

わたしは、この息子を自分の手で、場所もはっきりわかるようにして、埋葬してやりました。

それでそこにもいるわけにいかないので、これからまた具志頭の玻名城へ行くことにしました。朝みんなつれだって、具志頭の玻名城部落まで行ったんです。そこにはハワイ帰りのおじいさんがいましたんで、この人は物分りのいい方だったもんですから、こっちからお願いして、前の小屋ですね、山羊小屋であったのを山羊がいなくなっていたので、貸して貰って、それに草を敷いて一時住んでいたんですよ。こっちもまた立ち退けということになったんです。警官みたいなのがいて、早くどこかに行けと強く繰り返して言うので、逆に具志頭村同字を越して港川方面へ向かって通ったんですよ、夜から、朧月夜であったんですから。それで向こうへ行ったら艦砲が激しいんですよ。そこの松林の中には日本軍の馬なんかも隠されていたんですよ。あまり激しいもんですから、大きい家の馬小屋に入って、ようやく朝までここでしのいで、夜の明けない中に、逆にまた戻って来たんですよ。逆に具志頭に戻って来て、あちこちさ迷っていましたが、それからまた、うちの部落の聖になっている仲伊保（同じ中城村）の方がいましたんです。その方が宜保（豊見城村）で行きあったからくっついてしまってですよ、いっしょに。それからギーザバンタの上に行って小屋を作ろうとしましてね、茅を刈りて小屋をヤネテ（骨組をつくること）茅をかけていたですよ。またそこも追われました。こんなのにおったって危いのでいけないから、どこかに行けと、警官みたいなのに言われて、真栄平に行くことにしました。

真栄平へ行く途中、今お話した仲伊保のおじいさんが非常に弱ってですね、年寄りだから、ボロなども重い荷物を担いでいるから、うちのように歩けないんです。家内は子供を負ぶって、両方に子供をつれて、救急袋を肩からかけて、それからわたしは、子供の着物やらいろいろ畚に入れて天秤棒で担いでいるんだが、仲伊保のじいさんが追うて来ないもんだから、途中で自分が担いでいる荷物を下して、この人を引っ張って来ようと戻って行ったわけです。そうしておじいさんを連れて帰って来たら妻子はいないんです。それからわたしは爺さんを待たして荷物も置いて追っ駈けて、大声で叫ん

で捜したんです。しかし、駈け足で追っかけ、余程駈けて行かないんでは、いる筈だがとあちこちさがし廻ったがどうしても見つかりません。子供たちもつれているし、どうしてこうまで早く逃げ去ったか、不思議なくらいでした。いくら捜しても見つからないので、とうとう、わたしは自暴自棄的になって、どうにでもなれと思ったですね、そうして仲伊保のじいさんを待たしてあるところへ戻って、それからは、わたしは妻子と別べつにわたし一人、捕虜になるまで家内は子供たちといっしょに、別れて歩いたわけです。

それで自分は真栄平に行ったら、伊集の人間がたくさんいたですよ、この人たちは、わたしより早くに行っているので、川の中の体を隠すいいところを選んでいたわけです。川といっても水のない小さな暗渠みたいなところで大勢の人が入っていました。わたしは、上の方の隠れる土手のない、野っ原といっしょのところしかないので仕方がないから、そこに、松の枝なんか切って来て、ただ体が見えない程度のものを作っていました、雨でも降ったらずぶ濡れになるのですが、そうしていて、真栄平の井戸へ行って水を汲んで来たり、仲伊保のおじいさんもいっしょですから、おじいさんと二人の食糧あさりに芋を畑に行って掘って来たり、この人をかばっていましたが、家内と別れているので淋しい思いをしながら、夕暮れになると、歌（琉球民謡、古典）ばかり歌っていました、それでも子供等のことが心配でなりません。そうこうしていると、艦砲がうちらの上から飛んで行って、うちの部落の方がたの住んでいるところがやられてしまってですね、その時、七名いっぺんにやられたんです。わたしの部落の宮平という親類一門が、相当大勢がいっしょになって、集まっておったんですが、いっぺんに七名死んだもんですから、晩方になるのを待って、まるで死んだ豚や山羊でも引きずるように、四名で手足をつかんで、艦砲の穴へ引きずって行って放り込んで、埋めもしません。それは仕方がないんです。海からは艦砲、空と陸とからは地上砲火が来るので、土をかぶせることはできない、ゆっくりやると自分にも当るという危険の中だから、死んだ人のことなんか考えられない、皆がそうなっているんですからね。大人も子供も女も交じっていましたよ。

それでそこから逃げて、今度は、逆に、真栄平の小さい松が生い繁っている野原へ行きまして、そこで一晩泊るつもりで、松林の中に坐っていたら、西原村小波津の夫婦、五十歳ぐらいになる人たちでしたが、やって来ました。そうしてわたしたちのところに、腰を下して話しました。

「今赤ん坊を生き埋めして来た、ほんとに今日は泣かされた」といって、わけを話しました。この人たちは舅、姑、嫁の三人がずっと戦争に追われて歩いていたのが、嫁が今日お産をした、お産をすると間もなく破片でやられて即死した。それで男の赤ん坊だけが残された、夫は防衛隊に取られた。ところがこの子供をつれて、この戦争の弾の降る中を逃げ廻っておったら、子供はどうせ生きる道はない、子供に上げる牛乳もなければ、何もほかにない、ご飯をくれるわけにもいかない、仕方がないから生き埋めしたと、こういう話を聞かされました。わたしたちのいる山と、山は同じ山であるが、子供を埋めてどこかに行くつもりであったでしょう、でわたしたちが隠れているのと偶然にそこで遭って、円陣を作って、煙草を吸い

ながら、そのおじさんから話を聞いたわけです。

それからここもどうにもならないと思って、荷物も担いで、下りて行ったら何部隊であったか、炊事部隊の中に入り込んでしまってね、山の中で炊事をしおったですよ。「馬鹿」大きな声で叱られたわけです。

「どうもすみません、わからないでこっちへ来てしまったんですから」と詫びましたら、お前たちはどこへ行くかというので、わからんで逃げ場所をさがしていますといったら、じゃ、こっちから下りて行ったら、ギーザバンタへ行けるから、あっち行きなさい、といわれたので、それでまた真栄平から、逆にギーザバンタに下りて行ったんです。ギーザバンタは、元いた具志頭の玻名城部落から近いわけですが、兵隊に教えられて、ギーザバンタへ行ったんです。

それでギーザバンタへ行ったら、水もないし、壕一つもないんですよ。話を元に戻しますが、わたしの伊集部落の人で新垣亀というて、この人は生きているのでしたら八十七歳になるぐらいの人ですが、先きに話した真栄平の水のない川で大勢やられた人たちといっしょに、怪我したんですよ、ここ（肩甲骨の下を示す）石で穴あけられていたんですよ。

その人がわたしにくっついてしまって、わたしはその人をつれて、怪我してしまっているから、ご飯食べさせてやったり、寝起きさせたり、わしは面倒ですよ。その人つれてギーザバンタ下りたわけです。

仲伊保のおじいさんは、捕虜に取られるために別れたんです。わたしは、捕虜になるのは男でないからという気持で、生きられるだけ生きのびようと思って捕虜なんかにどんなことがあってもなるものか、捕虜になったら、股を引き裂かれて死ぬんだから、しのがれるうちはしのいでおろうという気持ちで、ギーザバンタへ行ったわけです。

ところがそこへ行って見たら、わたしは米は一升ぐらい持っていたが、炊いて食べることはできないんです。海からは艦砲が来るんだし、上からは地上砲も来るし、どうしようもない、六日間、飲まず食わずでいたら、まあ、めまいして、もう目がちがって来るんです。どうしてもこっちで食べ物は求めることはできないから、さあ、こっちから出ましょう、しかし途中で見つかったらもう駄目だろうが、仕方がないから、飢え死にするより出た方がいいじゃないかといって、その意気込みでもって、薬罐一つと、二升炊きの鍋、この一つはわたしは放さなかったんです。それを持って、岩かげから逃げるつもりでやったら、誰か避難民が兵隊に告げたんでしょうね、後から肩をたたかれて、後を向いて見たら、友軍の兵隊です。敵の監視艇はすぐ近くに浮いているので、それに見つかったら危いと思って岩影から隠れて逃げるところだったんですかね、隊長は少尉だったですが、こっち来いといって、兵隊のところへ連れられて行って、「坐れ」厳しい声の命令です。怪我したおじいさんもいっしょですが、おじいさんには何もいわない、もっぱらこっちに訊問ですよ。それで右腕が切れて、左手に拳銃をもって「坐れ」と怒鳴って拳銃をつきつけました。恐かったですね髭もぼうぼう生やしている片手の兵隊は。それで少尉はわたしのそばに来て、「何のためにあっちへ行くか、あっちへ行ったら、ボイラーの中に放り込まれ

て死ぬがお前はそれがわからないか」それでわたしは、「わたしはそういうつもりではありません、ここにいては飢え死にするから、お金は持っているがここでは売ってくれる人がいない、何か食べ物を求めて出た方がいいんじゃないかという意味であって、決して敵に降るつもりはない、これは兵隊さんが、わたしを見そこなっています」と反撥したですよ。そうしたら、「ばーかーやろー」と怒鳴るなり、小尉は持っていた日本刀の長い剣の鞘で殴ぐられたですよ。今も疵がこんなに（頭のてっぺんの細長くへこんだ疵跡を見せる）あるですよ。「馬鹿野郎、何を嘘吐くか」といって帽子の上から殴られてですね、痛くはなかったですが、しばらくするとあついものが額いに流れて来ますからね、さわって見たら血です、それであっちは海だから、岩のくぼんだところに潮が溜ってあるので、兵隊さんに見せて、潮をかけて洗ってですね、古いタオルでそこをしばったんですが、またそれから訊問です。「はっきり言わんとお前は許さないぞ」というので「はっきり言います。わたしは娘二人が、一人は球、一人は石の方に補助看護婦として従軍させているが、別れてからまだ一べんもこれらに会っていません、飢え死にする。飢え死にする前に、この子供等を一目でも見たい、出て行って歩いていればどこかで会う機会がある、そのつもりで出ようとしたのであって、決して敵に下るつもりはない」。わたしがそう言ったら、急に態度が変りましてね、「あなたはほんとにそんな立派な娘を持っているのか、それでいて何でそんなことをするか」、「だからあなた方はわたしを見そこなっている、わたしの考えを間違った見方をするからそうなる、わたしは銃と剣は持ってはいないが、銃後の国民として、増産に、供出に、徴用に、あるいは貯蓄債権に、部落の責任者として国家に御奉公している、ただ銃剣持っていないだけであって、気持ちはあなたがたと異ってはいないはずです。ただ娘たち会いたさに外へ出たかった、別に敵に降る気持は毛頭ない」、このように一気に言ったら向うもすっかり和らいだんですね、それでまた言ったんですよ。「まあ、ひもじいか、お金はあるか」そこで「お金は上げますから、何か食べる物を買ってくれませんか」とお願いしたんですよ。またつづけていいました。兵隊になら、この一帯にいる避難民から買うことができはしないかと思いましたので。「この人がやられて今日まで六日になりますが、あれから何も食べていません、水も飲んでいませんのでお願いします」といったら、「うちもあなたがたといっしょにひもじい思いをしているんだ、我慢しなさい」というので、「ああ、そうですか、それではいっしょに死にましょうね、兵隊さんといっしょにここで死ぬのは、わたしは本望です、そうしたらどこにも行きません」そう言ったら、「そんなわけにはいかない、わかったから、あなたたちの好きなようにやったらいい」といって許されたんです。

それで、その足ですぐ逃げたんです。上に這い上ったんですね。行ったら敵が待ってですね、捕虜になるつもりはないのに、捕虜になってしまったんです。それでもわたしは捕虜にはなりたくなかった、捕虜は大勢の人ですよ、わたしもそれにまぎれ込んでいるが、みんなが捕虜になって行くのがみっともないから、どこかから逃げ場所はないかと、歩きながら、そればかりに心をとらわれていまして、逃げるつもりでいました。横道もありはしましたが、逃げると

すぐやられるので、そうこうしているうちに、うちの部落の人たちが捕虜になって、入っているのを見て、「ああ、部落の人たちもいるから、逃げる必要はない、いっしょに行こう」そこで気を取り直して、百名の方へ歩いて行きました。

百名へ行って、握り飯を一つくれましたので、その握り飯がですね、六日振りに、はじめて食べたんですから、何ともいえない、おいしかったですよ。

わたしは、ギーザバンタの下で殴られたが、あの少尉の顔は、今もよく覚えています。もし生きているなら会って話して見たいな、と時どき思いますよ。

百名から知念に越えて、知念から自由でバラバラになったわけですが、それから佐敷村仲伊保まで行って、そこで旅先きで知り合った吉田という人がいたので、その方にお世話になって、小さい家を借りて暫く向うで落ち着いた。そうこうする中に、妻子が、知念村久手堅へ来ていることがわかったので、妻子を呼びに行き、仲伊保でいっしょに暮しました、その時は、うちの兄さんたちもいっしょでありましたがね、それからまた、やはり佐敷村の新里へ移動して、それから与那原から船に乗せられて久志の二見にまで行った。あっちに行ったら東恩納先生、今の西原中学校の校長していられる、この先生にもいろいろお世話になった。

それから建設のために村へ移動して、今の当間の下で建設をした。それからまた津覇学校に来て津覇を建設。

今度は奥間へ。伊集の行く先きは奥間ということで、奥間、伊集、南上原の三か部落は二か年の間、奥間に住んで、土地も割り振りして、奥間には、ずいぶんお世話になりました。

家族は、九人でしたが、長女は球、五中隊の看護婦に取られて従軍、帰りませんでした。二女は石の三中隊に補助看護婦で軍といっしょでした。終戦後まで生きていましたが、あっちで病気になって帰って来て間もなく死にました。それから屋宜原で十三歳になっていた次男が真先きに弾に当って死にました。長男は十五歳、三男は十一歳でありましたが、家内といっしょに歩いていて、この二人は、弾で即死したんですね、結局、九名家族が、わたしたち夫婦と一番下の男の子四男と、まだ家内が背負ってつれていた女の子の四名だけが生き残りました。

今いた子供たちは、四男の子供、もう三人できています。さっきいたのは四男の家内です。

註、新垣三郎さんの和宇慶でのテープは、声が細くてよく入ってなかった、それから和宇慶でも不明のところが相当にあったので、疑問点、不明の点を正すために、伊集の新垣さんのお宅で再録した。本記録はほとんど再記録によって纒めたものである。

新垣トミ（四十七歳）主婦

お父さんとはぐれたので、一晩は片っ方ばかりつくってあった小屋へ行って、芋を掘じくって来て洗って、薪木も取って来て乾かして燃やそうとしたら雨が降るし、どうすることも出来ない。着るものもありませんし、三男が夜通し「お父さんよー」といって泣きましたので、わたしも子供たちもみんな泣きました。何も、食べさせ

るものもありません、くれる物もありません。すぐ近くに那覇の方が、筵なんかも持った方がいましたので、今晩一晩でありますから、何か借して下さいませんかと頼みましたが、借してくれませんでした。それで夜明け方に、お父さんはそこらに死んでいるかもしれないからお母さんは行って、捜して来ようね、といったら、お母さん死んだらわたしたちはずっとここにいるの、といったので、それではみんな具志頭玻名城のおじいさんたちにまた行こうねといって、行きましたよ。そうしたらそのおじいさんは、われわれもここにおられない、ギーザバンタへ行くが、あなたたちもいっしょに行くか、それともお父さん捜しに行くか、というので、わたしたちはお父さんを捜して人の行くところへ行きますと言ったら、塩も味噌も芋も、子供等におのおの分けて帯にくくりつけて持たして、大変情けの深いおじいさんでありましたよ。

それではわたしはおばあさんとギーザバンタへ行くから、もしかお父さん捜したら壕はあけて置くから来なさい、といって、そんなにして別れました。

兼島少尉はこっちの陣地、球部隊の三中隊の少尉でありましたが、少尉は、与座、仲座の川の傍に立っていて、「おばさんよ」と引き止めましたが、わたしは頭が空っぽになっている時で知っている人とは思いません。「あの散らし雲のある時は、もう一発来るからそれを注意しなさいよ、もう一発弾が行ったら歩きなさい」といわれました。それからちょっと歩いたら、呉屋小のおかあさんたちが、その川のそばにいましたよ。そうして、「今あなたと話していた人は兼島少尉だったんですよ、お母さん」といわれて「ああ、そうだったのか、それではトシ子を連れていないのだものトシ子はいなくなっているんだな」といって、兼島少尉の顔見に戻って行ったら、兵隊だから、山の中に行ってもういませんでした。

そうして千人ばかりの人ですが、いろいろのものを担いだり提げて持ったりして、歩いているので、わたしたちはただ人の後について歩いているわけですよ。ナーハウンメーから首里ウンメー（那覇のおばあさまから首里のおばあさま）、わたしは子供を負んぶして、そうして、連れて行きたがる人はいないわけです。人が休むと休んで、「お前たちどこへ行くのか、早く行け、用事があるなら前へ歩け」といわれても返す言葉はないわけです。前が歩くとわたしたちも歩く。そうして前に行くと小松林がありましたよ。そうしたら、首里のおばあさまが、「どうですか、おばさん、死に場所をここに決めようではありませんか、いっしょにつれて行く人もいないのだし、ここはいいところのようだから」この首里のおばあさまがこうおっしゃったから、首里のおばあさまは女の子がお伴して、那覇のおばあさまは女の子と嫁とがお伴して、わたしたちは母子五人、「それではそうしましょうね」といって、小松林の中へ行きました。

そうしたらそこには、国場（那覇市）の人が大勢いましたよ、芋も掘って来て、水も汲んで来て、食べていましたが、水を少し飲ましして下さいといってもくれませんでした。

そうしておると、兵隊が暁、夜明け前に朝起きして、少尉がついて防衛隊が真栄平の川へ水を担ぎに行きました。「兵隊が水を汲んで来るからみんな起きなさい」、といって、何か容れものをさがしたり、手拭を水で濡らして、それも飲みましたよ。少尉がついている時は、水をくれました。防衛隊が解散なってからは水飲ます人はいません。水汲みに行ってもみんな死んで、帰っては来ないんですから。

わたしは、夜中でも、兵隊たちが下る時には、子供たちがおりはしないかと思って、伊集の新垣トシ子はいませんか、新垣フジ子ではありませんかと呼んでいました。そこにいる二十日間、ずっと夜中でも、夜明けでも呼びました。そうすると、親切な兵隊さんは、そうではありません、と返事をしてくれましたが、何の返事もしてくれない兵隊もおりました。

わたしたちのこの小松林の中に、首里の人で、七人家族がおりました。お父さんも怪我して、長男、上の子も怪我して、二男も怪我して、五人怪我していました。多分怪我してからここへ来たのでしたでしょう、一番下の子とお母さんとだけが怪我していませんでしたが、この人たちは、食糧は何一つ持っていませんでした。

わたしたちがいたところは、今ですね、与座、仲座からちょっと歩いて行くと、摩文仁への自動車はこれに通りますね、また新垣、真栄平への道は、われわれがいたところをまっすぐ通ります、すぐその合い中になっていますよ。その小松林の中にずっといたんですが、今も行く度びに忘れません。

註、その場所は、与座、仲座方面から真栄平や新垣への道路が、与座岳と八重瀬岳の中間を通って摩文仁へ行く、道との交叉点に近い北がわで、具志頭がわの合い中か、あるいは西、真栄平がわの合い中か、後に出る話しで、糸満方面へ行くといって十字路へ行ったというのから考えると、摩文仁へ行く道を横切らない、具志頭の仲座方面がわの東の合い中のように思われる。

その陣地（避難所をいっているらしい）に、怪我している「リュウさん」という兵隊がいましたよ。わたしたちは、鍋も人のもの借りて芋も煮ていました、鍋はお父さんが持っていましたので。それでリュウさんは、ギーザバンタの方へ下るといっていましたので、兵隊さんも芋を煮てあるから、分配して食べて下りなさいねといって、ほんの小さい、鶏の卵ぐらいの芋が小鍋に煮えてありましたので、子供たちにも二つずつ、リュウさんも小さい芋を二つ上げました。リュウさんという兵隊さんは、親切な方でした。球部隊の三中隊でした。「勝いくさもして、おばさんたちの恩も返して帰るんだと思ったんですが、今度は負けいくさでありますから、一生おばさん方の恩義だけ受けましてね」、といってね、ほんのおや指の大きさの芋二つをわたしの手から渡されて食べましたよ。

「もしか、ギーザバンタに、トシ子がいましたら、連れて来て下さいませんか」と、リュウさんが立ち去る時に、言いました。

「わたしがあっち行くまで、やられないで元気でありましたらつれて来ます」といったんです。あとでトシ子の話でしたが、リュウさんがギーザバンタへ来た時、トシ子はあそこにいたそうです。

「お母さん方があっちにおられるので、つれて来いと言われたよトシ子さん」といったそうです。

「あっち行く途中で、リュウさんか、わたくしかがやられてもいけませんから戦争が終ってから行きましょうね」ということだったそうです。トシ子は、兵隊といっしょの時に体を悪くして帰って来

てから死にました。それでそことわかりました。
トシ子たちがギーザバンタに下る途中だったそうですが、兵隊が、十二、三になる子供が担いでいる食糧を全部奪い取って、ギーザバンタで煮てくれてあったそうです。それでトシ子は、自分の弟たちもこんなに奪い取られて腹を空かしているのだろうなと思って、兵隊たちのくれてあるものを、「わたしは今日はおなかの具合が悪いので食べたくありません」といったら、「この子は執念深いよ、奪ったものだというので食べないんだよ」というので、「そうではありません、胃が痛くて食べないので、後で食べるから、わたしの分は置いといて下さい」といっているところへ、リュウさんが来たそうです。一日に一回しか食べ物はないですから、非常にひもじくはあったが、おかあさんが生きているということを聞いて、それではみんな生きているだろうと思って、食べる気になって、少し手で取って口に入れたそうですが、どうしても喉から落とそうとしたが、あの子供から奪い取ったものが、自分の兄弟たちが持っていたのを奪い取ったような気持ちになって、この兵隊たちといっしょにおる間は、食い物は欲しくなかったそうです。
それから喜屋武岬でのことだそうですが、やはり部落から兵隊の補助看で出ていたよし子さんがいました。トシ子はこのよし子さんと並んで坐っていたそうでありますが、よし子さんは弾に当ってそこで即死したそうです。よし子さんがやられたので、トシ子は、もうわたし一人しか生きていない、やはりわたしもやられるのだろうなと思ったそうです。
姉のフジ子は、元、山里病院に看護婦をしていたのがいました

よ、それといっしょだったそうですが、夜明け前の暁、石を積んで壕をつくって入ろうといって、兵隊が早く石を集めなさいといったので、石を集めていて、心臓をやられていたそうです。遺骨取りにも行きましたよ。「こっちでしたよ」といっしょだった看護婦がつれて行って言ったんです。フジ子を埋めてあった上の方には、兵隊をたくさん埋めてあったんですよ。それで家から着て行った何かしるしがあればつれて来ましたが、奥歯の二番目に虫歯があるのは当っていましたので、これは頭を抱いていましたが、もしかそれが違っていて、自分等の墓に入れて置いてはいけないのにといってつれることができませんでした。どこでだったか聞きませんでしたが、沢村少尉が、今度のいくさは駄目だから、兵隊はどうせ生きることは考えられないから、この貯金通帳も印といっしょにお前持っていて、お前たちが結婚する時は、一ことでも沢村少尉は情けがあったと話をしてくれといってくれたそうです、切り込み隊に出られる時に。
それで、それでも何でも目じるしがあると、連れて来ましたが、何も目じるしがありませんでね。頭はみんな似ているのでありますよね、一度は行って骨もあさってすべて見ていますが、二度目からはそこはなくなっているのでありましたよ、最初行った時は石もありましたよ。場所は、摩文仁部落の後の上の山でありますよ、具志頭から来ると割り取りがありますよね、割り取りの左がわの丘で、そこに葬ってあったそうです。最初にはあった石も、二度目には石取りが取ってありませんでした。
やがて暁の鶏が鳴く時刻でありましたが、兵隊と看護婦たちが下

るので、いつものように伊集の新垣フジ子ではないですか、トシ子ではないかと呼んでいましたら、同じ部落の宮平貞子と新垣静子が通ったので、「トーメ山（屋号）のおっかあだよ、お前は貞子ではないか」といったら「はい」と答えるので、「トシ子は」と訊きましたら、「トシ子は港川を出た時にですね、兵隊といっしょに下ったから、元気のはずです」と知らされたので「ええ、元気のはずか」と口真似をしました。トシ子はさっき話しましたわたしの次女でありますよ。
それで宮平貞子と新垣静子は、わたしたちを見たのでいっしょになるといって、兵隊とは別れて足を止めました。
わたしたちがいた丘でありますが、新垣と真栄平の境ではありませんでしょうか。あれにも道があれば、真栄平の川にはこれから道がありました。場所はよく分りません、皆が歩いているから歩いていたわけでありました。
それでみんなが糸満に行きましたから、われわれだけここにいられないから行こうといって、前の十字路に出たら、わたくしの三男は、「わたしは行かないよう、お母さんよう」といって大声に泣きましたよ。「そこにはいられないのに皆が行くところへ歩くんだ」といって歩かしたんですが、ちょっと前へ行ったら死なしてしまっているんですよ（イヒグワー前ンヂ、死ナチルウイビーンデー）これが泣いていた時に、引き返したら助かっていたでしょうがね。皆が歩いて行ったので歩いているわけでありましたが、前に艦砲が落ちましたから、わたしは照子（三歳になる三女）を負ぶっていましたが、すぐそこに伏せしていました。貞子が先頭になっていまして、「おい、こっちにお出で、おいで、そこに艦砲は落ちたんだから、もっと落ちるよ」といっていましたが、その言葉の終ると同時に、駈けて行ったところに艦砲が落ちて、四人いっしょにやられていたんです。それで、この子供等がどうして死んでいるかと捜していると、友軍の兵隊が、「ここからうろうろしているなら撃つぞ」と銃を向けました。もうこのような状態でありますから、アキサミヨーナー（ああ、といった感嘆詞）とクサーウッチエーリテ（動顚して、あるいは、たまげての意）ぼんやりしていますと、すぐそばに小屋が葺いてありましたが、友軍の兵隊も避難民もみんなごっちゃになって、大勢死んでいました。
そうしてそこからは出て行きまして、この四男も血がだらだらしていましたよ。貞子の皮が剝がれて引っくり返って、ちょうど四男に蔽うていたんでしょうよ、貞子はお父さん（夫）のいとこの娘です。
「ああ、お前もこんなにしているのか」とわたしはいいました。「いいえ、お母さん、わたしは怪我ではありませんよ。貞子姉さんの皮がわたしを包んで、おうていたんですよ、わたしは何もしていませんよ」といいました。その時は薬も何も持ってはいませんでしょう、頭に被るものもなくて、出して歩いていたのです。それで血を拭いて見ましたら、四男の子はどこも何もしておりません、それでわたしは、「ああ、お前は」といったきりで、言葉も出ませんでした。
「まあ、お母さんが生きているのなら、お前たちを連れに来るから」といって、すぐそこに松の葉の束ねたのがありましたので、こ

の子供等に打ちかぶせて、帰って来ましたわけでした。小さい子供等をつれて。

それでその時からは、食べるものはぜんぜん持ちません。そうして戻って行く時、十字路に津覇のウワーチャンナー小（屋号）のおじいさんも、指をたたき切られて、坐っていましたよ。

「あなたもこんなにやられたんですか」といったら、「ダーアンセーナー（どうもまあ、そうなったんでもう、）糸満に越えるといって、壕にいたら、こんなにはならなかったが」といっておられました。あっちのお家は兄さん一人だけ生きましたはずです（生き残ったと思います）。

貞子の家は新垣小といいますが、そこもおじさん一人生き残っています。

それから首里の一中（県立一中、現在の首里高校）の先生とおっしゃっておられましたが、妻子は疎開させまして、お母さんをお伴していられましたよ。

そうしてわたしたちのところへ来られて、「かかる方がない、すがる方もない、おばさんどうすればいいかな」といっておられました。そうして芋を二人で掘って来ても、あっちの芋は、痩せ地ですから、ちょうどおや指ぐらいしかありません、（みんなが、二度も三度も掘って取った後だから、と主人の三郎さんが言葉をはさむ）それから水も無いんですから、唐黍の下葉をもぎ取って来て、芋は下に置いて、夜じゅうそれを燃やしてですね、そうして焼くわけです。

それから、何も持ってはいないのですから、帯を引き裂いて、小さい松と松、それに唐黍の茎といっしょにして、これを結えて、それが小屋だということで、子供等も共に入っているわけです。

そうして一中の先生は、二人で芋は分けて、「わたしたちの芋は煮えませんよ、おばさん、どうして焼いていますか」と訊きなさるので「自然に焼けますよ、わたしたちのものは二つ三つ焼けましたので、子供たちにくれていますから、辛抱してお焼きなさい」と申し上げましたが、火を燃やしたらアメリカの軍艦が海から見えますから、それで着物でカタカ（遮蔽）して、こんなにして小さい芋を煮て食べて、そうしてついにはわたしたちは、そこから捕虜に取られていますよ。

そうして、蛸壺を掘るアメリカーが、わたしのところから見えましたよ。友軍の兵隊は、それを殺しにといってあっちに行きますので、「いいえ、こっちから行くと殺されるぞ、うしろの方から廻るんならあれらを殺すことができるが」といったんです、わたしの言うことをきいていたら死なないでもいいものを、わたしのところを行き過ぎて、ちょっと前で二人死んで、すぐわたしの前で撃たれて、わたしは角の低い石垣の陰に隠れていますから、一日中小用も、そこに坐っていてやりましたよ、着物へもそのまま、たこ壺掘り（米兵）が前にいるのでありますから。

それから、戦車で焼かれている兵隊が、口からも鼻からも垂れも出ますが、友軍の兵隊でありますから汚いとは思いませんでしたよ。二人の子供を自分の股の中に入れて抱いて、三人で、「ああ」と溜息ばかりくり返していましたが、また元坐っていた畑の溝に行きまして、六月ですから太陽にも照らされてひもじくもあるの

です。そうしていると、友軍の兵隊が、靴下に米をいっぱい入れて持っていましたよ。そうして「おばさんは、これ貰うか」といいましたので、「兵隊さんがくれるんでしたら頂きます」と言ったんです。そうしたら、「これをお前たちにくれると捕虜されるかしれないのでお前たちにはくれられない」といって、それを剣で切ってそこにバラ撒きました。こんなンザリ者（心の悪い者）もいましたよ。

前で、七人家族の首里の人のことを話しましたが、五人怪我して、一番下の子とお母さんと二人だけが怪我してなかったんですが、そのお母さんは、夜の明けない中に水を汲んで来ましたよ、それでわたしは、「わたしに少しずつ水下さいね、おばさん米はわたしが兵隊から貰って持っておるから、飯盒のいっぱいずつ煮ると、この子供等の喉を湿おす分ずつ分けられるし」といって、その人から水を貰って、ハンゴーの一杯ずつ煮ると、あっちに七つ持って行き、わたしたちも三つで三人分、こんなにしたこともありました。

あの球部隊の食糧から洋服から運搬して、糸満へ行くのが、もう向かって行くことができないというので、わたしたちのいる小松林に突っ込んで入れてありましたよ。それで、自動車の下に兵隊が穴を掘っておりましたよ。わたしたちは十七人のシンカ（人員、団体）。兵隊さんの名は、渡辺さんといいました。子供たちにくれても、兵隊が食べても、ちょうど同じである。食糧は持って行けないのだからといって、米も、鰹節も、粉味噌なども分けてくれてありました。兵隊も、那覇のおばあさまも、首里のおばあさまもみんないっしょですよ。そうして、何にもできないので、トラックの下に坐っているわけなんですね、歩けば海だし、どこへ行っても物は何もないのであるから畑からキビを折って来て食べることにしましょうといって、朝の度びにわたしがキビをたくさん抱いて持って来ましたよ。わたし一人が元気がありましたから。そこに坐っているのはみんな足を怪我したり、兵隊も入っているんですが。

そうして捕虜取られた朝は、二十一になる兵隊で、志願兵といっていたが、「おばさんね、今日は敵の弾が近くなっているから、このドラム罐に弾が当ると、照子の心臓が持たないから出ていた方がいいよ」といったんですから、わたしは畑の溝に出ていましたよ。

それから二時間ばかりしたら、トラックの下に穴掘っていた人たち全部が、やられてしまったのでありましたよ。みんなで三十七人から、わたしたち三人だけが助かって、全部死んでしまっていたのでありましたよ。わたしを出した兵隊さんも、一時間ばかりはいっしょにいましたが、ひもじくもあるし、六月の太陽が暑い日でありましたから、トラックの陰のみんなのところへ行って、いっしょにこの兵隊さんも亡くなりました。チールという音を立てて火が来ましたよ、それでやられているはずです。

それからわたしたちのうしろにいるおばさんが、真直ぐ坐っていますが、死んでいるんですよ。「ねえおばさん、われわれアメリカーに見られておるよ」、といっても答えもしない。目は開いたまま真直ぐ坐っているのだが。それで、「おばさんよう」といって頭さわったら引っくり返ってしまったんです。それで「ああ、何んと大変なこと」と思うと同時に、アメリカー七、八人が、わたしを取りまいていました。四男は眠っていましたが着物を打ちかけて抱いて、

五、六間ばかり歩いていましたよ。そうしたら、あれらはこうですよ、指を上に向けて自分のところへ指を曲げる米国式ジェスチュアーで、カマン、カマンしながら。その間にわたしは物事の理非が考えられた訳ですね、そうして照子を下に置いて、「お二拝」（二拝三拝の二拝で沖縄の最敬礼）しているわけです。そうしたら、あれ等も近か寄って来ない、わたしも寄って行かない。それで進（四男）だけは、どこかに怪我させては大変だものと思って、後にはわたしが出て行きましたよ、あれらのところへ。「おい進。起きなさい、アメリカーが見ているから。もしか、お母さんとお前とアメリカーが離れさせようとしたら、着物が引っ切れてもいいから、お母さんの腰に手を入れて置きなさいよ」、といっておきました。

友軍の教えは、そうでありましたよ。アメリカが日本の子孫の種子を無くするといって、ことに男の子ですから、友軍のデマを信じていましたので、この子をどうにかするのでないかと思って。それでわたしたち親子三人は捕虜取られていますから、しばらくすると、あっちへ歩けといって歩かされて行きました。そうしたら千人ばかり人がいますよ集められて。

途中には、キビ畑がありましたよ、誰からも手のつけられていない。それでその時は、二、三日物を食べていませんから、このキビを切って食べさせてくれといったら、「はあーあ」といいましたアメリカーは、鉄砲をつきつけて。

「ハーアーナー」（絶望的の中で決断する意味のこもった感嘆詞）わたしは少しこれを食べて行くのがいいと思って、その甘蔗畑にしゃがみ込んだら、仕方がないといったあんばいで、切って食べさせてありましたよ。そうしたら、あっちに千人ばかり集められていた人がみんな、さあと畑を蔽うようにやって来ましたよ、皆ひもじくしているのだから、わたしがそこにしゃがみ込んで甘蔗を切って食べさせるのを見てですよ。それからまた夜中歩かされて、友軍の兵隊がたくさん死んでいるところに集めらて、そうして自分たちは、また第一線に行きました。怪我人もいるので水を飲ましてくれるのはいましたが、翌日になっても、誰も連れて行くものは来ない、夜は雨が降りましたので、雨に濡れたままにしていました。

那覇の子供たちでありましたが、父母夫婦は、その日に弾にやられたといって、十三を頭に五人子供たちばかり生き残っていました。

「おばさんたちはどこへ行きますか」

「わたしたちも当てがない、どこへ行くかわからん、おばさんは米も持っているから、さあ、持っており次第煮て食べていいから、与座、仲座の川に行こう。飢え死にするのは子供でも、見ていいものでない、おなじ死ぬのなら物を食べて死ぬのがいいから、水をたよって行って、持っており次第米も出して、物を食べませんか」とわたしがいいました。お父さん方、おじさん方も大勢でしたよ。

「そうすると殺されるもの」というので、わたしは、「それではあなたがたは、ここに坐っていなさい、わたしたちは、同じく生きられないなら物を食べて死ぬのがいいから」といって、少し前に歩いて行ったら、いい具合に首里の人が捕虜は取られているが、わたしたちはどこへでも勝手に行っていいと言ったというので、首里へ行くのだといって、夫婦でザルなども担いで行きましたよ。「それではただ自由に自分の家へ向かって行かれるんですね」と訊いたら「そうでしょうよ」といわれたので、わたしたちもまた歩いて行きましたよ。そうしたら、やがて与座、仲座に下りるところの広っぱで、黒人兵たちが一生懸命に穴を掘っていました。そうしてわたしたちを見まして、ポケットに手を入れて探ぐっていました。お菓子をくれる積りであったんでしょう。それで菓子を持って来て、「さあ」、と出したので、「菓子は持っているから食べない」といったら、強いても食べろというので「何でもいいから取りなさい、取らないと殺されるかもしれないから二人取りなさい」と子供たちに言った、そうしたら黒人兵は自分も食べて見せますし、それから煙草も吸えというので、わたしは煙草は持っているから自分のものを吸うからといったら、必ずあれのものを吸えという。「あれも吸うのだからどうもない、毒も入れてはないだろう」と吸ったわけです。

こんなにしてくれるのに、どうもないなと思って前へ進みました。わたしは、今さっき父母がやられたといっていた那覇の子供五人を、捨てるわけにはいけませんよね、それでこの五人も連れて、いっしょに歩いたんですよ。

それで、あの橋渡って行ったところは、役所でないですかね、学校もあったんではないですか。そこの前の広っぱにいっぱい集められていますよ。それで、二世に、「わたしたち四、五日飢えていて、やがて死ぬから、米は持っているので、水くれませんか、米を煮てくれますから」「はい」といって水を飯盒のいっぱいくれてから二世はいいました。

「ほんとは、いくさをしに命令されて来る時には地方民には弾を撃たないといってだが、兵隊とごっちゃになって歩いたから、仕方がなかったんだよおばさん。それからほんとは、捕虜を迎える時は、おにぎりも作って迎えるように命令されているのだが、手が足りないので、上から命令されている通りできないのですよ、それでは、米を持っていられるなら煮てお上りなさい」といってくれて、ご飯を炊いていました。

ところがこの米が、まだ沸きらないうちに、出発だぞ、出発だぞ、という声です。沸ぎり出してやがて煮えそうでありましたが、あとになれば煮えるだろうと港川の方へ歩きました。それで毎日甘蔗ばかり食べていたので、腹が大きく膨れて、米俵でも前に抱へているようで歩かれませんでしたよ。それで、千人ぐらいの前になっておりましたのに、一番最後になって歩きました。

そうして富里、当山に行きましたが、そこには仮事務所がつくられてありましたよ。捕虜されて来るものにお菓子などくれるようにといって、その係りは沖縄の人でありましたよ。何か持っているものは、この罐詰を取るな、おばさんは、持っているものがあるから取るなというので「何というか、持ち物のあるのはくれるなとはどこからの命令か。わたしたちは、何も食べるものがなくて死にそうになっているのに、持っていても煮なければ食べられないのだ」といってわたしは最初に三人分奪い取りました。そうして、「いくさがなければ、この子供たちもそんなにならなかったじゃないか」といって、わたしがたくさん取って、那覇の子供等に抱かしてやりました。

そこでは、物を煮て食べていいようになっていました。それでわ

たしたちは飯盒に、それから十人ばかりの人が共同でお釜に、わたしたちといっしょに御飯を煮（炊き）ました。ところが、御飯が煮えた頃になったら、いつの間にか、お釜が無くなってありません。それで、何どき盗まれたかわからない、大騒動になりました。わたしたちは飯盒を持って来て、六、七日振りに御飯を食べました。

あの小松林の中にいた時、御飯を食べる人を見ると口汁がじいじい出ました。芋でも、国場ナケヤマの人が捨てるのを兵隊が見ましてね、「おばさん、すえた芋、あれ捨てる芋ですよ、貰っていらっしゃいよ」といわれて、わたしは貰いに行って、それで、これはそのままでは食べられませんので、手で握ってつぶして、与えましたよ。あの小松林の丘にいた時ですよ。ところが、そのすえた芋が、こんなにうまかった芋は、まだ食べたことはありません。すえた芋でしたが。そうしたら、「おかあさん、うまいね、」といって食べていましたよ、四男の子が。八歳の四男は、歯がないものですから、わたしが甘蔗を持って来ると、泣きましたよ。わたしは足が丈夫でありましたから、毎日甘蔗をたくさん持って来て兵隊たちにもくれていましたのに、トラックの下の溝で、みんな死んで、三十七人からただわたしたちの親子三人ばかり生きましたよ。わたしたちは、二十一になる兵隊のお陰で生きました。一時間ばかりいっしょだったのに、トラックの下に行って、あっさり死んでしまったのでありましたよ。

わたしたちがいたところと、長女が死んだところとは、山並びでありますが、見なかったのであります。（約一キロメートルの距離であったらしい。）わたしたちが捕虜取られたのは六月十八日でありましたが、長女はその朝に死んでいます。

長女は、非常に度胸がありました。「綱ヌアレー、国ンマルチュル　イナグ」でありました。（縄は、男で学問させてあれば、という意味であろう、それなれば国も治める人物だったという意味）看護婦は非常にのぞみでしたが、つぎつぎに生れるので、上の学校へ上げられませんでした。何とかなりましたから、これ一人は、のぞみ（希望）をかなえてやってあったらよかったがと、いつでも後悔しますが、それも仕方がありません。学問は大変希望でありました。年は十九歳でありましたが、恩田大尉にすすめられて、朝は西原学校で、看護婦の講習を受けて、帰って来ると恩田隊長に行って参りましたといって報告して、午後は陣地構築、壕掘りの作業へ出て畚担ぎをやりました。陣地は南上原の「千原」でした。

ちょうどその日、一番最初に沖縄へ空襲のかかった日（これは米軍上陸前、前年那覇が全滅した十十空襲から一時空襲が途絶えていたのでいよいよ、上陸前空襲が始まった日三月二十三日を指す）二十三日はフジ子（長女）が表彰を受ける日でした。西原学校で演芸大会もあって、表彰を受けると兵隊たちも来るはずだと思って、わたしは豆腐を一鍋全部買ってありましたが、空襲でわたしたちは壕に行っておりました。

次女のトシ子は十七歳でしたが、雨に打たれたり、栄養失調したりして病気になって、弾からは逃れましたが、家まで帰って、病気がそのままで癒らないで、死にました。

註、　長女フジ子さんは、今度叙勲されたことが新聞に報じられたが、まだ勲章は来てないとのこと。

恩田大尉は、千原の陣地を死守すると兼ねがねいっていたそうだが、その通り、そこで玉砕した由。

長女フジ子さんといっしょだった、山里医院に看護婦として従軍した「よし子さん」は、ここの陣地にいた山口県出身の上田という准尉と終戦後婚約して、結婚し、現在は山口県で家庭をつくり四、五人子供もでき、一昨年は墓参郷土訪問していたという。

新垣トミさん夫妻は、長女十九歳、次女十七歳、長男十五歳、次男十歳、三男十一歳の上から五人の子供が戦争の犠牲になり、男女、下の二人は生命を取り止めている。